

I N D E X

健康と登山	記：石原 達夫	3
私とヤマトのお付き合い	記：下河邊史郎	5

山想倶楽部山行記

2014 年

4 月：古戦場をめぐる山旅	記：横田 昭夫	7
5 月：知立祭見物と猿投山登山	記：石原 達夫	10
5 月：日向山ハイク報告	記：小亀真知子	12
6 月：米国グランドサークルの絶景を歩く 1 0 日間の旅		14
10 日～ 14 日	記：高橋 聡 / 石原達夫	16
15 日～ 16 日	記：寺田美代子	21
17 日～ 19 日	記：下河邊史郎	24
7 月：早月尾根からの剣岳	記：石原 達夫	25
9 月：会津駒ヶ岳と燧岳・尾瀬ヶ原	記：石原 達夫	29
10 月：八海山への再挑戦	記：日出平 洋太郎	34
11 月：奈良の二上山、葛城山等の史跡巡り	記：石岡 慎介	37
12 月：忘年山行 武川岳登山	記：西谷 可江	42

2015 年

1 月：新年会	記：高橋 聡	46
2 月：スノー合宿	記：武田 鞆子	47
3 月：バンフースキー	記：高橋 聡	50
3 月：北八ヶ岳 高見石～茶臼	記：日出平 洋太郎	58
表紙、裏表紙写真	川井 靖元	

健康と登山

記・石原達夫

ご存知のように寿命には平均寿命と健康寿命がある。健康寿命とは他人の手助けなく生活できる限界年齢だ。2010 年の統計によれば日本人の平均寿命と健康寿命は、

男性 平均寿命 79.55 歳 健康寿命 70.42 歳

女性 平均寿命 86.30 歳 健康寿命 73.62 歳

つまり男性は元気でいられるのは平均で 70 歳まで、女性は 73 歳過ぎまでということになり、何と男性は死ぬまでの 9 年間、女性は 13 年間、他人の介助を必要とすることになる。

しかし山想倶楽部の常連を眺めてみるとこんな事はとても考えられない。男性は 70 歳を大幅に過ぎても皆元気そのものだし、女性は 73 歳を過ぎてもこれからだというように誠に元気いっぱいだ。これぞ登山の効用というものではないかと思う。

私事で申し訳ないが、登山が如何に健康で丈夫な体を作るかということの体験について、少しお話しさせていただきたい。

戦後の中学生までは東京深川で過ごした。終戦当初は辺り一面焼け野原で僅かに工場の鉄骨とか煙突が焼け残っており、これらの廃墟や貯木場の池が子供達には恰好の遊び場となっていた。ところが復興が進むにつれ工場が新設され住宅も急速に増加し、夏の水遊び場だった貯木場の池の水はたちまちに汚染され、もうそこで泳ぐことは出来なくなった。

そのため子供達は屋内で遊ぶようになり、私は模型作りやラジオの組み立て読書で過ごすようになった。そのためか小学高学年のころから体質が変化し、加えて戦後の食糧事情もあり、好き嫌いの多い私は風邪をひきやすく胃腸も弱くまた常に蕁麻疹に悩まされていた。最悪なのは少し運動をすると夕方にひどい不整脈が現れ気分が悪くなるということだった。そうこうしているうちに精神的にも不安定になってきた。当然親は心配し、色々とスポーツを勧めたりしたが、私にはどれも面白くなく何一つ長続きしなかった。戦前の登山家でもあった父は多忙な時間を割いて子供らをハイキングに連れだしたりしたが、私はこれも興味がわかなかった。父はそこで私が小学生の頃鉄骨に登ったりしていた事を思い出してか、岩登りみたいな事なら興味を持つてであろうと思い、大学山岳部にいた親類の若者に私を沢登りにでも連れ出すようにと頼んだようだ。彼のホームグラウンドは谷川岳であったので東京から近いこともあり、早速私を谷川岳に連れ出した。中学 3 年の秋の頃であった。これが谷川岳通いの発端となり、早くも高校 2 年の夏には岩登りで有名な一の倉沢に足を踏み入れることになる。

ご存知のように、岩登りは両手両足を駆使し急斜面を短時間で登ることになるので、通常の登山より体力を要する。このような激しい登山の効果は目覚ましく、高校に入る頃は身長 159cm、体重 53 キロしかなかったが、3 年生の夏の頃には身長 172cm、体重 62 キロとなり、病弱体質は著しく改善され、全くの健康体となった。父親の勧めた岩登りなので誰にも憚ることなく一の倉通いに精をだした。従兄は大学を卒業し会社勤めとなったので、ほとんど山には一緒に行けなくなったが、一の倉沢に行けば必ず一緒に登る仲間がいた。いわゆる一の倉ゴロ達である。

山が興味の中心になれば反動で学業はおろそかになる。高校は都立の進学高だったので学力テストが学期毎にあるが、入学当初は成績順位が1学年400人中20番以内にいたのに、順位はどんどん下がり3年生の頃には200番にも入らなかった。進学高生の悪しき習慣で現役の大学受験は国立1期校のみということだったが、我が高校は、北海道から九州までの国立1期校に毎年現役で200人程度合格しているので、自分でもぎりぎり何とかできるかと思っただが、世の中そうは甘くはない、当然不合格となり浪人をする事になった。

この年の5月も末になり一の倉沢のシーズンが始まる頃、一の倉ゴロの仲間が立て続けに2名それぞれ登攀中に転落し死亡した。これまで転落死と云うのは何件も見たり聞いたりしていたが、それは他人ごとだと思っていただけに仲間が死んだという事実はまさしくショックであった。暗い気持ちで一の倉沢の出会いにあるいつもの溜まり場から、そろそろ出かけようとしていたときの事だった、谷川岳については高名な私達のチンピラにとっても尊敬すべき存在だった登山家に呼び止められ、日頃から私達の乱暴ともいえる登山態度を苦々しく思っていたのであろうか、「おまえら、そういう登り方をしているといずれ皆墜ちて死ぬぞ」と強く説教された。他の仲間はどうか受け止めたか知らないが、この言葉は私にとっては衝撃的だった。

もともと私の岩登りは健康な体を造るためのものであって、こんなことで死んだら本末転倒も甚だしいという事に今更ながら気付いたのだ。同じような事を岩登りの手ほどきをした従兄からも言われ、真剣に自分にとっての岩登りの意義について考え直すこととなった。こうなると登攀も段々と慎重になり、それがもとで仲間とも何となくしっくりいかなくなり、いつしか彼

らから離れてしまうことになった。

それを契機に浪人らしく受験勉強に励むことになったが、結果として1期校は滑ったが、何とか希望する大学に入学できた。そこからは別のストーリーが始まるが、今回の主題からは外れるので又機会があれば書いてみたい。

兎も角、それから自分にとって登山と健康は切り離せないものとなったが、少なくとも登山は命をかけるものではなく、人から慎重すぎるあるいは臆病だと言われようが、余裕を持って楽しむものとなったのは事実だ。

なお蛇足ではあるが、その後、一の倉ゴロの仲間のうち何人かは岳人の間で名を知られるクライマーになった。しかしその無謀ともいえる登山スタイルは最後まで変わらなかったようで、最終的には予言どおり、ある者は冬のヨーロッパ・アルプスの岩壁で、またある者はヒマラヤの高山で、それぞれ転落あるいは雪崩で死亡している。

了



(石原達夫さん)

私と山とのお付き合い

記・下河邊史郎

私と山との付き合いは、既に60年を超す長い付き合いになります。

山との出会い？は、恐らく小学校高学年の時、家族で奥多摩あたりにハイキング？ピクニックに行った時に、父親が枯れ木を集めたき火をただけなのか、お茶を沸かしたのかは記憶にないが、実に楽しい時間を過ごした記憶が有り、中学に入学と同時に当時公立の中学では、珍しく登山部が有り、登山部に入部。春、夏、秋部活動で楽しい山登りを教えてもらったのが山との付き合いの始まりである。

高校の時は、山岳部に入ろうとしたが、親の反対で入部はできなかったが、友人と秩父の山々を歩いたり、一人で日帰り山行を秩父の山を歩いて過ごした。

大学入学と同時に体育会山岳部に所属。

授業に顔を出さなくても、部室には必ず毎日通い早朝トレーニング、夕方のトレーニング、合宿前のルート研究と称する自分には未知の山道を先人の記録を調べ、地図を読み、さも自分が歩いた事のように上級生の前でプレゼンテーションを行い、出来が悪ければ何回も繰り返し行はれ、岩登りのルートに関しては、自分の登るルートについてポイントは何処にあり、その場所の手がかり、足がかり、ザイル・パートナーの確保の場所まで、入念に調べなければならず、さらに多くの登攀記録を読破しなければならなかった。

私の学生時代、大学山岳部の最終目標は、ヒマラヤの初登頂が目標であり、部室生活、合宿はその為の下作りの所が有り、4年間の学生生活は、部の合宿、個人的な山行等で、年間の入山日数は、平均100日を超しており、山登りと東京での部室生活と言った山一色の学生生活で有り学部卒業と言うより体育会山岳部卒業。

当時、ヒマラヤは、ヒマラヤ遠征と表現され、8,000m峰(ヒマラヤに14座)初登頂と言った、探検的な要素が強く、時間と膨大な費用を必要とし、その為、マスコミを初めとした多くの企業のサポートにより行はれ、ヒマラヤに行くには大学山岳部に所属するのが早道で有り、事実4年生の時にヒマラヤ遠征の計画が有り、留年を覚悟して参加するつもりでいたが、ネパール政府が突然鎖国。この計画は断念。

現在は、ヒマラヤに行くにもパック旅行で簡単に行けるようになり、仮にヒマラヤのピークを目指しても、自費での登山が一般的である。

我々高齢者がヒマラヤのピークを目指しても、お金と時間が有れば何とか登ることも可能・・・？私も、社会人なりたての当初2～3度山に行ったが、それ以降はさっぱりご無沙汰。

企業戦士？に変身。特に、30代、40代は、海外駐在が有りまったくのご無沙汰。

定年後、さて、何をしようかな？と考えた時、学生時代に入会した、日本山岳会に復活。

ここから、世に言う中高年登山を開始。

幸いにも、学生時代からの山仲間も同じような状況であったので、彼らと日本の北アルプス、南アルプスを始め、北海道の山々、東北の山、山陰の山等を春、夏、秋と登り、いよいよ憧れ

の海外の山々へ踏み出す。

第一歩は、アフリカの最高峰キリマンジェロ（5,685m）高度順化を兼ねてキリマンジェロの山麓を4日間歩き5日目に登頂、下山後は、3日間サファリを楽しむ。

続いて、東アジアの最高峰・マレーシアのキナバル（4095m）登頂。

三番目に、日本山岳会自然環境調査隊に参加、憧れのヒマラヤへの第一歩。ヒマラヤ・エベレスト街道チクンピーク（5,545m）カラパタール（5,5545m）エベレストを眺められ展望台のような山、頂上からは、プモリ（7,165m）、エベレスト（8,848m）ローツェ（8,383m）がよく見えた。感激！！

本来の目的は、地球温暖化による崩壊の心配が一番高いとされる氷河湖イムジェ湖（5,000m）にある氷河湖の調査。道中民意の聞き取り調査、簡単な測量等を行う。

しかし、ヒマラヤ初見参の私自身は、長年の憧れであったヒマラヤを自分の目で見て、肌で感じたい調査は2の次であった。エベレスト街道では、道中、私の好きなアマダムラブを十二分に眺め楽しんだ。

4番目は、オーストラリアの最高峰コジウスコ山（2,228m）これは、トレッキングを楽しむ。

5番目が、生涯での最高到達地点、ヒマラヤのメラピーク（6,654m）である。

幸いにも天候に恵まれ、頂上からの眺めは素晴らしく、はるか遠方のエベレストが小さく低く見えた。登頂までの苦労も忘れ爽快である。高度と長時間の登攀で、アタックキャンプに戻った時は、達成感よりも疲労困ぱいで、脱力感あるのみ。

6番目、7番目は、欧州アルプスの山であるが、私は、高齢者には適しているように感じる。

ほとんどの山が、ガイドとザイルを結び登るガイド登山である。

6番目のイタリー、スイス、スランスの山は、かなり高いところまでロープウエーで行くことが出来、氷河歩きが出来、山頂にも割合と簡単に行くことが出来た。

7番目のオーストリアの最高峰、グロスブロックナー（3,794m富士山より少し高い）は、氷河の上をザイルを着けて歩き、岩稜を日本にないフェラータと言う方法でよじ登り、そのあとは、アイゼン、ピッケルでの雪稜登攀。実に面白い。

スロバニアの最高峰トリグラウ峰は、高さは2,900mに満たないが、最後の350m程は、まったくの岩峰、岩を登るスタイルで、ガイドとザイルに繋がってよじ登り、よじ降りるこの岩峰もフェラータである。（フェラータとは、欧州は国境が山岳地帯であり国境警備の軍隊が岩稜を素早く、安全に移動するための手段に岩稜にワイヤー、鉄杭を取り付けてある）。欧州の山は、多くの所が、「山麓はハイジの世界」その上は、氷河、岩稜、雪稜。実に楽しい登山が出来る。麓には、文明のホテルが待っている。言うことなし。個人的には、高齢者には、ヒマラヤよりも欧州のアルプスの方が年齢に合った山登り、トレッキングが楽しめるように思う。

今後も、「生涯登山」をめざし、日本の山を季節、体力に合わせ楽しみ、機会があれば、海外の山も登り続けたい。



（下河邊史郎さん）

古戦場をめぐる山旅

記・横田昭夫

桜花爛漫のこの季節、残雪の山ならぬ、今から400年以上も前の西暦1600年豊臣政権の崩壊を決めることとなった関ヶ原の古戦場を探訪した。また、時代は少しさかのぼるが北近江に勢力を誇った戦国大名浅井（あざい）氏の居城とし、堅固な山城として知られた小谷山（おだにやま）を訪れた。

期 日 平成26年4月5日（土）～4月6日（日）

参加者 石原達夫、高橋聰、吉永英明、田矢八束、日出平洋太郎、小亀真知子、菊池武昭、寺田正夫、寺田美代子、下河邊史郎、川村光子、西谷可江、高橋文雄、廣島孝子、武田鞆子、横田昭夫

4月5日（土）晴れ

JR東海道新幹線岐阜羽島駅に全員集合する10:32。駅前にて15人乗りレンタカーをチャーターする。大型免許が必要で運転は高橋さんをお願いし、定員オーバーの為、横田車と2台で行動する。名神高速を走って関ヶ原へ、関ヶ原ICを出ると即、古戦場に飛び込む。まだ元気なうちにと、この関ヶ原の戦いを決する引き金ともなった小早川秀秋の陣跡の松尾山に登る。黒血川を渡ったところの駐車場に車を置き、林道を歩くとスギ林の中にミヤマカタバミ、ショウジョウバカマが現れる。林道を登り切り、峠手前から右へ折れ、尾根筋のアップダウンを繰り返

し、標高293mの松尾山につく12:20。

この陣地は高い山の上に有り、主戦場となった平地からはかなり遠く、参戦・寝返りを思案するには絶好の場所といえる（関ヶ原の戦いの勝敗を決した要因の一つに小早川秀秋の寝返りがあったといわれている）。この日はやや風があり、とても霧の出る天気（関ヶ原の役の当日、慶長5年（1600年9月15日早朝は濃霧で戦況を望むことができなかった）ではなく、眼下の古戦場を見渡すことができた。山上はまだ桜が咲かず、馬酔木の房状の花が見ごろでヤブツバキは散りかけていた。また、モクレン科のタムシバが白い花を咲かせていた。ここで少し遅めの昼食を済ませ車に戻る13:30。

次に国道21号線を東に行き、13:40 桃配山（ももくぼりやま）の徳川家康の最初の陣跡へ行く。ここは国道21号バイパスによって地形を変えられてしまっているのが陣跡かと思わせ



（小早川秀秋陣所跡）

るが、当時は小高い丘でここから戦場に向かって緩やかな下りとなっていたようだ。ここは早々に引き揚げ、J R 関ヶ原駅北の歴史民俗資料館に行く。館内でパネルを見ながら関ヶ原の戦いの概要を聞き、資料を見て研究する。皆興味津々でここでゆっくりと時間をとる。この付近は陣場野といわれ家康最後の陣跡があり、また西軍の諸将の首実検が行われ首塚もある。400年を



(関ヶ原古戦場徳川家康最初の陣地跡)

く狭い道を抜けて、関ヶ原の戦いの開戦地を訪れる。少し離れたところの小西行長の陣跡を見て、車でさらに移動して、歩いてスギ・ヒノキの鬱蒼とした林の中の宇喜多秀家の陣跡を訪れる。関ヶ原の戦いは豊臣政権後の覇権争いで、戦国生き残りの武将が多数参戦しており、地元関ヶ原町が史跡を大切に保存しているので探訪は尽きないが、ひとまず打ち切りとし、今日の宿舎、大河ドラマ軍師・官兵衛の黒田家発祥の地・木ノ本町黒田近くの己高庵（ここうあん）へ向かう。己高庵は己高山（これだかみやま）のふもとの静かな山里にあり、広間でゆったりと己高庵お自慢の「季節の会席料理」を食す。食後、一室に集まり懇親を深める。



(松尾山にて)

隔てた現在でも当時の凄惨な様子が目に浮かんでくる(15:00)。

次に決戦地を経て西軍の立役者、石田三成の陣跡 笹尾山に登る。この陣跡は攻守の良さは別としても戦況をつかむには最適の場所だ。戦場に近く見晴らしが良い。また、周囲に桜が咲いており、三成の優しさを醸し出している気分させる。笹尾山を下り、国道365号を横切り、民家のひしめ



(関ヶ原古戦場開戦跡)

関ヶ原の合戦

慶長五年（1600年）九月十五日

天下の覇権を狙う徳川家康率いる東軍と、阻止するため挙兵した石田三成率いる西軍が関ヶ原を舞台に、天下分け目の戦いを繰り広げた。

両軍布陣後も前夜からの深い霧で見通しがきかない。薄暗い霧が、これからここで起こる激戦を予知するような空気さえ醸し出していた。緊張感の漂う中、無言の睨み合いは続く。

霧が少し晴れた午前八時頃、東軍井伊直政により、決戦の火ぶたが切って落とされた。

総勢八万四千の西軍が、必勝の陣形で東軍を迎え撃つ。一方、東軍は七万四千人。大将家康は、桃配山に本陣を置き、戦況が不利になると、本隊を激戦地・陣場野まで前進させ、東軍の士気を高める。

正午ごろ、家康からの圧力もあり、小早川隊は反旗をひるがえし、同調した他軍とともに、大谷隊を衝く。その後、小西・宇喜多隊は敗走。さらに石田の隊も勇猛果敢に応戦するが挽回の余地なく敗走。天下分け目の決戦は、開始よりわずか六時間余りでその勝敗が決まる。

—関ヶ原町資料抜粋—

4月6日（日）小雨～本降り・一時雪

天気の崩れは午後からだということであったが早く降り出した。己高庵を出発前に集合写真を撮る。木ノ本駅前の蔵元富田酒造を訪れ銘酒「七本槍」買い求める。9:50 小谷山登山口の駐車場から歩き出すころには冷たい風が吹き出し、北陸特有の冬型を思わせる空模様となる一旦林道に出て、再度山道に入りしばらく行ったあたりで雨がかなり降り出したので、頂上まで行くのを断念し、本丸跡までとする。高橋（聰）、高橋（文）、寺田（正）横田の4名は車を取りに下り、10:30 あとの12名は小谷城本丸跡まで往復する。林道終点へ車で引き返して、降りて来る人たちを待つ間、雪も一時強く降りだす。11:00 本丸跡から降りてきた人たちを林道終点で合流し、清水道入口の小谷城戦国歴史民俗資料館へ行く。このころは風も強く、雨も本降りとなる。ここで浅井三代の歴史資料を見る。12:30~14:00 伊吹町伊吹薬草の里にて各自思い思いのまま、昼食やビールを飲んだり、薬草風呂に入り14:10に出発し、15:20 J R 岐阜羽島駅へ戻りレンタカー等の清算を済ませ散会した。



(己高庵前で)

知立祭見物と猿投山登山

記・石原達夫

期日 平成 26 年 5 月 3 － 4 日

参加者 武田鞆子、田矢八策、石原達夫、泰子、今津（武田友人）

5 月 3 日

今日は連休の真ただ中でしかも土曜日、東京駅新幹線改札口は見たこともない長蛇の列、やっと改札を済まし、ホームに出ると人の山、無理して指定席を取っておいてよかった。大人の休日倶楽部はブロックアウトの時期なので、久しぶりにフル運賃を払い、しかも普段は使えないのぞみに乗る。横浜を出ると次の停車駅は目的地の名古屋、速いですね。名古屋からは名鉄の特急電車の座席指定車に乗り、知立駅に。武田さんが駅で待っていてくれた。歩いてわずかで知立古城にある武田別邸に着く。

ここで勝手に寛いでいるうちに武田さんの一族が集まり、にぎやかに昼食となった。

皆さんと談笑中に、おもてがおはやしの音や人声で騒がしくなったので、急いで家の外に出ると山車の一番目が通過するところだった。基本的には 2 本の綱を子供たちが引っ張って山車を引くのだが、山車の周辺は大人たちが固める。山車の中にはお囃子衆と子供達の謡い手が乗りこみ、間断なく囃したてる。

山車は重そうな木製の固定 4 輪なので、方向変換とか、修正は屈強な若者が 2 本の梶棒にそれぞれ 4 人ずつ合計 8 人で後輪を持ちあげ、車の方向を変える。



（山車の方向転換）



（山車）

これには各人相当な集中力があるようで、片棒の 4 人がぴったりとくっ付いてしばし精神統一し一気に持ち上げる。国道に出る直線部分はこのままで移動するが、下りの狭い坂道だけに気

合が入り、なかなか壮観だ。関係者を装って最後の山車にくっついて行き、山車の集合地である知立神社に行く。すごい人出で、折りからの風で砂塵が舞っている。早々に神社に参拝し雑踏を避けて少し遠まわりをして別邸に戻る。夜は下戸ばかり集まって、ホテルの和食堂で静かな晩餐を楽しむ。夜は古城の武田別邸に泊めていただく。

5 月 4 日

朝は 5 時過ぎに起き、直ちにパンの朝食を頂戴する。

6 時過ぎには、登山に同行する武田さんの小中学校の同級生だった寿司屋の今津さんが自転車でやって来る。6 時 3 0 分には武田さんの車に同乗し三河の国三宮である猿投神社に向かう。どこかで聞いた名前だと思ったら、重要文化財の檜鳥糸織大鎧（かしどりいとおどしよろい）を所有していることでその道の人達には有名だ（昔その道の人だったので）。

車は神社より少し上の登山者用駐車場に停めるが、最後の 1 台分が空いていた。出発を急いだ訳だ。7 時 1 5 分頃、支度をして駐車場から続く林道を暫く歩く。以前に焼物用の材料を粉碎するのに使ったトロミル水車とか、お倉岩とかを見て、御門杉の立つ登山路入口に着く。標高 6 2 9 米の山にしては結構急な登りとなる。林道を横断し少し登ると立派な休憩小屋があり一休みする。また林道を横断ししばし登れば鳥居が出てきて東の宮の神社に出る。ここまでは全く展望はないが新緑の樹林帯は綺麗だ。ここからは穏やかな登りとなり、ひょうきんな形をした蛙岩を見る。右手に御岳が見える場所と云うポイントがあり、眺めれば確かにうすぼんやりと御岳らしい山が見える。まもなく山頂に着く。天気は良いが霞がかかり遠望の山々は見えない。



（猿投山の記念写真）

いる。この下が西の宮でやはり宮内庁の管理下にある。ここからは急な階段を下ることになるが、登って来る人もいる。どうやらこのお宮まで来る人が多い様だ。やがて登りに歩いた道に合流し一気に登山道入り口まで下る。途中は親子連れや若い人のグループとかとすれ違い、追い抜かれる。あまりジジ、ババの登山者は見かけない（尤もこちらは相当なジジだけ）。駐車場に着き、車にザックを置き

5 分ほど下の猿投神社に参拝する。お宮には企業が奉納した大きな左鎌が多数掲げてある。皆トヨタ系の会社である。大碓命は左利きで左鎌を使って開拓したということに依るらしい。社務所に重文の鎧が見られるか聞いたところ、今は保管が大変なので東京の博物館に預けてあるとの事、平安、鎌倉時代の 2 振りの重文の太刀も同様か。



（猿投山の奥社、西の宮）



(猿投神社本社拝殿と奉納の左鎌)

これより猿投温泉に向かう。温泉地では大勢の入浴客と思しき人たちが歩いているのに驚かされる、さすがにゴールデンウィークだ。日帰り入浴の金泉の湯(岩風呂)に入るが入湯料は1,500円で少々高い。この湯はほぼ純粋の重曹泉で、売りは高い濃度のラドンを含有するということである。放射線恐怖症の人には全く向かない温泉だ。少し混んでいたが芋を洗う状況ではなくゆっくり温まった。このあとは武田別邸に預けた荷物を受け取り、知立駅に送ってもらう。大台が原に行く田矢さんとは名古屋駅で別

れ家路を急ぐ。今回の催しでは、武田さんに大変なお世話になりました。深く感謝します。

日向山ハイク報告



(日向山頂上にて)

記・小亀真知子

日程 平成26年5月18日(日帰り山行)

参加者 平井喜久枝、石原達夫、寺田正夫、寺田美代子、高橋聡、日出平洋太郎、小亀真知子

お天気に恵まれ、新宿発7時30分のあずさ3号の車窓からは、雲一つない青空を背に雪に覆われた真っ白な富士山が聳え立っていました。茅ヶ岳、南アルプス、八ヶ岳と続く景色に感動していたらアッと言う間に小淵沢駅に到着です。この小淵沢の駅よりは予約していたタクシーに分乗して、日向山登山口迄向かいました。途中の路は、芽吹いたばかりの樹木の間から八ヶ岳が見え、甲斐駒ヶ岳が目の前に迫ってくるようでした。



(甲斐駒ヶ岳)

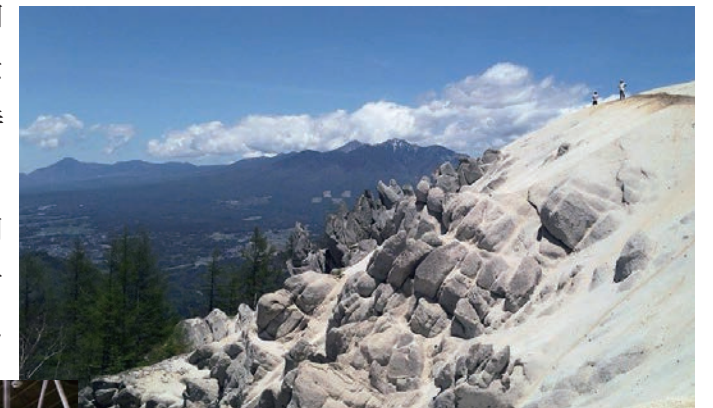
登山口を10:30に出発し、日向山は良く整備されたハンキングコースで、登り始めは少し急でしたが、土止めも良く為せれており、とても歩きやすい路でした。山つつじが盛りを迎えて橙色の花をつけ、少し登るとピンクの三つ葉つつじが所々に花を付けていてとても綺麗です。落葉松も芽吹いたばかりで可愛く、紅葉も葉を広げたばかりで陽に透き通るようでした。秋はさぞ綺麗だろうと想像し、これは秋になったら一人ででも十分に来る価値が

あることを確信してしまいました。

約一時間半程でトップの方は12時には頂上に到着したようですが、送れる事15分で私も到着。早速登山道より少し上に有る頂上を見に行きました。山頂は花崗岩のサラサラとした砂地で、すぐ横にある末端の方は切り立った崖になっている。反対側の山肌も緑に覆われた中、崩れ落ちた岩肌が露出し不思議な光景です。山頂の延長上には、お地蔵様のような岩の塊が立ち並んでいました。八ヶ岳が目の前に見えて大感激です。

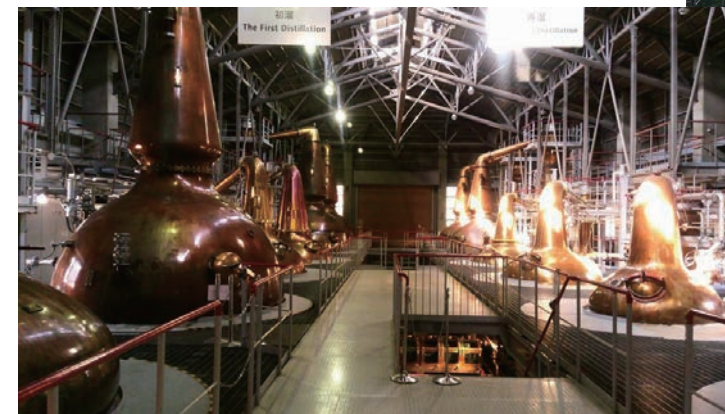
昼食後は超特急で山を下りました、14:30にタクシーが来ると言うので、そのために急いだのですが、思ったより早く14:15には登山口に着いたので、タクシーを待たせることがなく、かえって私たちが20分程タクシーを待つようになりました。

これより帰路は、寄り道をしてサントリー白州工場の見学です。初めて訪れましたが、その広大さと、よく手入れされた環境に関心し



(日向山山頂から見た八ヶ岳)

ました。石楠花が盛りを迎えて綺麗に咲いており、約一時間程で見学を終えて最後は試飲タイムです。私は下戸なので全く飲めませんが、飲める方たちは、水割り、ロック、ストレートなどを楽しんでいました。サントリーのシャトルバスで、小淵沢駅迄送ってもらい、列車の予定時間には一時間ほど時間があるので、駅傍のお



(サントリー白州蒸留所蒸留ポット群)

鮎屋さんで軽く打ち上げ会をし、今日一日の天気と景色に感謝すると共に、地図迄用意してくれた幹事の平井さんに感謝、感謝です。平井さん有難う御座いました。

米国グランドサークルの 絶景を歩く10日間の旅



アンティロープキャニオンでの集合写真



アンティロープキャニオン内部



コロラド川ホースシューベンド

米国グランドサークルの 絶景を歩く 10 日間の旅

記・高橋 聡

6 月 10 日～6 月 14 日

今日から米国グランドサークルの旅だ。これは主としてユタ州、アリゾナ州が隣接する地域で、北米大陸で国立公園、国定モニュメントが最も多く隣接している地域で有り、グランドサークルにはグランドキャニオンを始めザイオン、ブライスカニオン、アーチズ等 8 つの国立公園、それに 10 を超える国定モニュメントがあり、州立公園も多く大自然の宝庫であると言われている。

13:30 の集合時間に成田に着いたら、そこには既に寺田夫妻が居る。まだ他の人は来ていないのかなと思っていたら、武田、廣島嬢が今荷物を預けてきた所と言い、ガイドの山田氏も現れる。山田氏に連れられ寺田夫妻と共に荷物を預けに行くと、吉永君、下河辺君も荷物を預け終えたところで有った。僕たちも荷物を預け終え、待ち合わせ場所に行くとそこには石原さんも居た。これで全員集合だ。石原さんは先の長い旅行があり、別便のデルタ航空でのフライトなのでラスベガスのホテルで合流することにする。

ボーディング 15:00、16:00 にランニングウェイに動きだし 16:20 にランニングを開始して飛び立つ。

徐々に暮れなずむ景色を見ている内に早々に眠りに着くも、出発し 1:30 程で夕食が出る。これは何か食事というものではなく、只食べれば腹の足しになるかなと言うような食事であった。日本時間の 11 日午前 1:00。現地時間では 10 日の 9:30 にサンフランシスコ到着。このサンフランシスコの空港の入国審査で何故か下河辺君が入国審査で放射能検査に引っかかるが、日本より医師の放射線治療の証明書を持参していたので、何事もなく入国出来た。放射能検査は非常にシビアだ。サンフランシスコ発 13:20。ラスベガス着 14:40。空港より表に出るとまるで熱風が吹き荒れている。溶鉱炉の前で強い風に煽られているようだ。これはこの地方では

当たり前の事らしいが、初めて来た者には非常に堪える。空港でレンタカー (15 人乗りのマイクロバス) を借りて本日の宿である EXCALIBUR HOTEL CACINO に到着。ホテルの中に入るとそこは既に賭博場で有る。カードゲーム、スロットル、ダイス、ルーレット、バカラ等何でも揃っているが、我々の仲間は誰もそれらには手を出す人はいなそうだ。

石原さんも到着しており、各自夫々割り当てられた部屋に落ち着き、シャワーを浴びたりして時間を過ごし 19:00 に集合して夕食にする事とする。夕食はハンバーガー等のジャンクフードにするか、buffet にか迷うが、僕は下河辺君、寺田夫妻と共に buffet の食事とし、その料金は 25 ドルの支払いであったが、ユナイテッド航空の食事と同様、あまり食べられたものではなかった。



(高橋 聡さん)

6 月 11 日

朝 6:00 起床して、少し体操をしてから朝食に行く。既に 2 階のレストラン街で武田、廣島嬢が食事をしている。付き合いでクロワッサン、バナナ、コーヒで食事 15 ドル。昨日のメシと比べると量は少ないが美味しく食べられた。

8:00 に昨日の予定通り出発する。広島嬢が 17 年前にこのラスベガスに来たことがあるが、その時はホテルの廻りには家は殆んど無かったが、民家が非常に増えていると言って驚いている。道路もその時と変わって広がっているようだ。

9:50 ネバタの北方のメヌキーサというところでトイレ休憩とする。ここも一階はカジノであるが、主にユタ州の方よりカジノを楽しみに来ている人が多いそうだ。何故か全員アイスクリームを食べている。11:30 に米国最大と言われているスーパーマーケットであるウォールマートに寄り、明日からの水や朝、昼用の食糧を購入した後、各自思い思いの食事をして 12:50 に出発する。

13:45 ザイオンパーク内にある今夜と明日の宿である QUALITY INN AT ZION PARK に到着。ユタ州はサマータイムを使用しているとの事で時計の針を 1 時間進め 14:45 に直す。荷物をホテルに入れ 15:30 にバスで終点のテンプル・オブ・シーナウエーブ (Temple of Shinawave) に行き、リバーサイドウオーク (片道 1.6 回のバーজন川沿いの路) で両側に数百 m の垂直にそびえる岩山を見ながら歩き、最後は両岸が迫った沢、The Narrows でトレイルは終わる (その先、川の中を延々と歩くことも可能)。ここから戻り、ビジターセンター等で買い物をして 18:20 にホテルに帰ってくる。



(ザイオン溪谷 ガルチ入り口)

食事は 2 軒程レストランがあるが、1 件の方は満員なので軽食のみを出しているところでの食事となった。明日はサマータイムで 7:00 朝食、7:30 には出発なので早めの睡眠としよう。高橋が携帯紛失で騒いでいる。恐らく前日止まったラスベガスのホテルでベットの傍に忘れて来たのだろう、ラスベガスのホテルに連絡するも遺失物係の勤務時間は午前 9:00 より 18:00 迄との事で明日再度確認する事とする。

6月12日

本日は高低差が453メートルあり、歩行時間で約5時間程ある岩峰の頂きであるエンジェルス・ランディングへのハイキングだ。7:00に朝食後7:40にバスに乗りエンジェルス・ランディングの始発点まで行く。8:10バスを降りたら直ぐに左手に有る橋を渡り、砂埃りの路を少し歩くと簡易アスファルトの路となる。歩き出しは最初緩い登り坂であったが、直ぐに急な斜面となり

り九十九折りの路が延々と続いているようだ。やっと見晴らしの良い所(稜線のコル)に着くと、少し左手の方に何やらトイレらしきものがある。行ってみるとトイレではあるがお世辞にも綺麗だとは言えない。いつ掃除したのか不明で有る。男子は立ってするのでそれでも我慢が出来るが、座ってする場合は少し勇気が要りそうだ。このコルより頂上迄はリッジ状の急な岩場の連続であり、太い鎖が延々と安全の為に頂



(エンジェルス・ランディングへの登路)

上迄付いているがそれほど難しくはない。本日は登下降のお客さんが非常に多い為各所で渋滞となっている。岩場の途中で石原さんが若い女性から、手を差し伸べて貰ったとかで、やっかみの他のメンバーから冷やかされることしきりであった。コルより約一時間で頂上に到着し(11:00)軽く食事を摂り写真を撮って下山とする(11:25)。



(ザイオン NP のエンジェルスランディングのリッジ登り)



(エンジェルス・ランディング山頂)



(エンジェルス・ランディングよりの眺望)

早い人はさっさと降りていくが、何人かは膝を庇いながら慎重に降りていく。コルの所で集合し、全員いるのを確認したのち、足の速い人たちはさっさと降りて行く。膝の調子のよくない人たちはゆっくりと降りて行き、バス停に13:45に着く。バスも直ぐに来たので、ホテルに15:00に帰着。本日の夕食は18:00からとして、各自ゆっくりとバス等に入り本日の疲れを癒す。今晚の食事は昨日予約しそこなったレストランだ。今回米国に来て初めて食事らしい食事となり、吉永君が1ポンド(450g)のステーキを頼み、軽く食べてしまってもう少し食べたいという言葉聞いて、他の人たちは哑然としてしまっていたようだった。明日はページに向け出発だ。

6月13日

朝7:00に朝食とし、8:00出発。本日はグランドキャニオン上部にある人造湖レイク・パウエル町ページへの移動だ。ホテルより少し走り、長いトンネルを抜けた所に駐車場がある。



(ザイオントンネル先オーバールックへの登り)

9:40駐車場へと帰着。ここより10分程度走りチェカーボードメサを過ぎたら急に樹木が増えてくるが、特段に高度が変化したのではない。やがて樹木も少なくなり牧場となってマウント・カーメル・ジャンクションを過ぎてしまった。10:45カナブーのマーケットで休憩し、12:00にビック・ウオーターのビジターセンターに着く。此のビジターセンターには9000年前の爬虫類や巻貝の化石が展示されており、小さな博物館の体を為している。ここを出て5分程走るとアリゾナ州に入ったので、ユタ州では夏時間だったが、ここアリゾナ州では夏時間を採用していないので、1時間ほど時間を前に戻す事となった、なんだか面倒だ。ページ郊外にある神秘の世界と言われているアンテロープキャニオン(水と風が砂岩である地下部分を浸食して出来たスロット状峡谷)は比較的人の少ないローワーキャニオンを見物13:55～14:40。

ここに車を止めてキャニオン・オーバールックに行く8:40。

目の前に有る階段を登り、トレイルをたどると30分程で目的地に到着。昨日より眺めている山並みや、昨日登ったエンジェルス・ランディング、ザイオンより走って来た道が遥か下にはっきりと望遠出来る。



(ザイオントンネル先のオーバールックで)

その後グランドキャニオン上部にあるホースシューベンド (川が馬蹄形に蛇行して見晴らしの良い所) を見物。ここは我々が立って居る所より水面まで 300 メートル位ありそうだ。下の水面ではボート遊びをしているものがある。後は本日の宿レイクパウエルリゾートホテル迄だ。15:30 ホテル着。チェックイン迄暫らく待たせられたが何事も無くチェックイン。部屋は 1 階で庭に面していて気持ちが良い。

6 月 14 日

朝もやっと明けたかという 5:15 に全員集合。本日は『ザ・ウエーブ』で有名なバーミリオンクリフ国定モニュメント内のバックスキン・ガルチ (Buckskin Gulch) だ。全員車に乗り走ること 30 分で本日の地元のガイドとの待ち合わせ場所であるパリア・レインジャー・ステーション (Paria Ranger Station) に到着。既にガイドは来ており、本日のランチの配給だ。ここよりはロング・キャニオン沿いの悪路の為ガイドの 4WD に乗り換えて 6:00 出発、狭くて屈曲し、凹凸の激しい尾根道を走る事 40 分でミドル・トレイル入口に 6:40 に到着。ここよりは砂地で歩き難い路を少し登り、後は遥か彼方に見える地溝帯に向けて谷状の所を前進するのみだ。このトレイルは最も短い距離でバックスキン・ガルチに到達できるトレイルである。この深い峡谷の縁に 8:30 に到着。何処を下れば良いのだろう。狭いチムニー状の所をガイドは下っているが、一寸見には少し厳しそうだ。



(バーミリオンクリフ ナショナルモニュメント、バックスキングアルチに入るチムニー)



(バーミリオンクリフ ナショナルモニュメント、バックスキングアルチへの下り)

先ずはガイドが下り、続いて廣島君が続くが何だか危なっかしい。続いて高橋が下り他の人の下るのを手助けする。チムニーを降りたら今度は少しいやらしい所をトラバースし、トラバースが終わったら、クーロアールを下り 8:50 に全員『バックスキン・ガルチ』の底に到着。少し休憩後歩きだすこと 15 分くらい、幾ら歩いても同じような景色が延々と続いている。この『バックスキン・ガルチ』は全長が 24km もあり、われわれが降り立った所は丁度中間地点で一番浅くて穏やかな所でもあり、溪谷内を渡渉し上下より歩いてくる人もあるとの事、通常は途中溪谷内で泊まることになる。足元は砂地であるが、一般的な砂地と違い、もの凄く細かく粉上の砂である。両壁は昨日歩いたアンティロープキャニオンと同じように何処までも延々



(バーミリオンクリフ ナショナルモニュメント、バックスキングアルチを行)

後は今朝歩いてきた浅い谷を通り、車の所まで帰るだけだ。砂地の歩き難い所をユックリ、ユックリと歩み 11:20 に車に到着。ガイドがよく冷えたビールやジュースをふるまってくれる。後は我々の車まで 40 分程で到着し、車に乗り替えて 12:40 にホテルに着いた。夕食はこのレイク・パウエルでは有名なデイナークルーズを楽しむ為 17:20 に集合として取り敢えず解散とする。夕食のデイナークルーズは一人 75 ドルである。デイナークルーズはもう少し良い食事でも出ると期待していたのだが、金額の割には期待外れであり、2 時間程湖の上をクルーズして終了した。船を降りると船員が湖に何か魚に餌を与えている。鱒の類かとよく見るとなんだか鯉によく似ている、聞くとカープだとの事だった。なんだか雲が空全体に張り出してきて明日の天気が心配になるが、明日は移動日で殆んど車の中よりの見物となるので、多少天気が悪くとも良いか。(石原補記)

6 月 15 日～ 16 日

記・寺田美代子

8:00 コロラド川をせき止めて出来た、米国第二の人造湖レイクパウエル、空には白い月が残り、湖の向こうからは日の出を迎え、花咲く庭にはリスが遊ぶのどかな湖畔の朝、アリゾナ州ペイジの街を後に一路ブライスカニオンに向かう。途中時計を 1 時間進めユタ州に入る。道は赤茶色の地層の岩山の間を抜け大草原へと進む。12:35 ～ 13:35 RUBY'S INN ホテルレストランで昼食、各々ハンバーグにどっさりポテト、スープやサラダを注文 (寺田美代子さん)



(バックスキングアルチからの帰路の終点付近)



米国風量の多いランチをシュアしながら味わう。

ブライスカニオンゲートに入り 13:40 ビジターセンターへ、此処のカニオンで見られる動物たち (マウンテンライオン、ガラガラ蛇、グレイトオックス、ミーアキャット、ウッドペッカー等) の展示物。地層の成り立ちの模型を見学後 1700 年前からの地層の成り立ちを学び、展望台へと向かう。14:45 展望台の奥のレインボーポイントの駐車場に到着し、ヨビンパポイント (Yovimpa Point)、フェアビューポイント、ブライスポイントにて広大な景色を眺望し、長い年月をかけ氷河や風に削り取られて出来上がった尖塔の見事な風景を満喫した。以後ブライスカニオンのジェネラルストアーで買い物後、17:00 に標高 2200m にあるホテルブライスカニオンリゾートに到着し、各々の部屋に。



(ブライスカニオンのホテル前にて)

6月16日

今回の旅もいよいよ最終ハイク地ブライスカニオンへ。

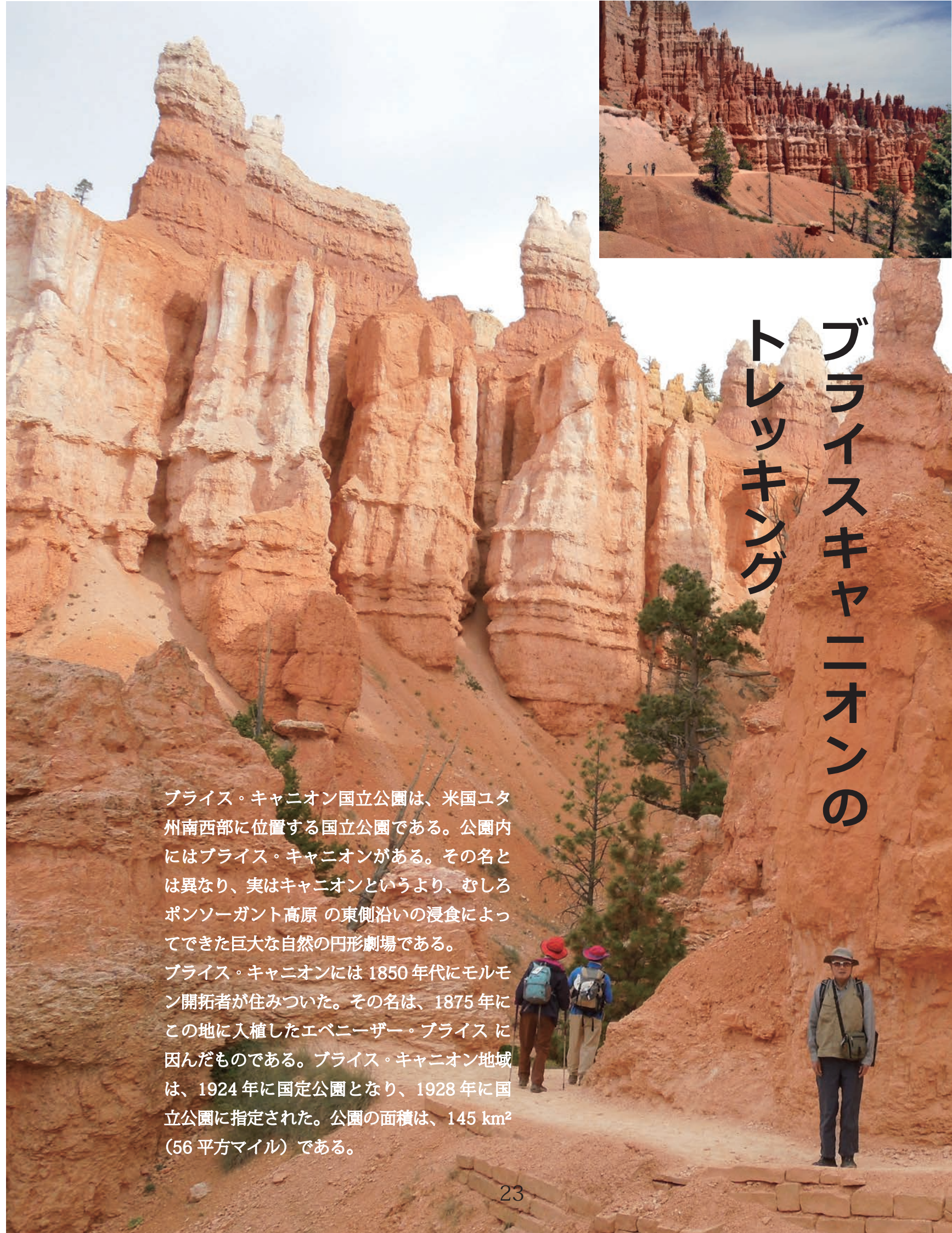
8:00 に集合するもなんだか空模様が怪しい。雨具を持参する事とする。8:20 にサンライズポイントに着き、身支度を整えて 8:30 トレイルスタート、クウィンズガーデントレイルより谷底の路へ進むと、無数の繊細な尖塔が夫々の雰囲気醸し出す不思議な世界、“わあーすごーい”の連発だ!!! 塔の中には動物の顔のような、ほほ笑ましいのもあれば、窓が並んだ様

なものもある。昨年スペインで見たガウディーの世界とも違う摩訶不思議な谷底からの眺めを味わいながら進む。数度の小休止を交えながらピーカブートレイル (Peekaboo Trail) に進み、トレイルの中間点である岩かべの木立の中で楽しい昼食。11:10 ~ 11:40 ウッドペカーが飛びリスが足元で遊んでいる。乾いた喉にオレンジがおいしい。

再び出発、登りが続く。トレイルは一周してピーカブートレイルの分岐点に戻り、小休止後、親切な老ハイカーの勧めで 2 本の橋のあるルートへ進む。上に 1 本、下に 1 本と重なった木の橋だ。道はつづらに曲がる登りのきつい道で日影を求めては、休みながらひたすら登り 13:30 サンセットポイントに到着し所要 5 時間のトレイルが終わる。真白くなったズボンや靴のあまりの変化に思わず写真を撮る。楽しかったハイクを語り合いながら集合写真を撮り車に向かった。見下ろすとブライスカニオンが広大に続いている。15:30 ホテルに戻り埃まみれの衣類や靴を拭くがあまり落ちない。

17:00 ~ 廣島さん、武田さんの部屋で抹茶でのお茶会。しばし談笑し何故だかほっとする。18:00 別の建物のレストランに向かい全員で夕食。今日迄の話で盛り上がり、楽しく夕食を済ませた。外に出ると風が冷たい。寒さにびっくり! 此処は標高 2200m 米国北西部の荒野のホテルの寒さを味わった。フードを被り首をすくめ急いで部屋に戻った。痛めている膝を庇いながらの旅。不安に思っていたが、楽しい旅だった。メンバーに感謝している。

(石原補記)



ブライスカニオンの トレッキング

ブライス・カニオン国立公園は、米国ユタ州南西部に位置する国立公園である。公園内にはブライス・カニオンがある。その名とは異なり、実はカニオンというより、むしろポンソーガント高原の東側沿いの浸食によってできた巨大な自然の円形劇場である。ブライス・カニオンには 1850 年代にモルモン開拓者が住みついた。その名は、1875 年にこの地に入植したエベニーザー・ブライスに因んだものである。ブライス・カニオン地域は、1924 年に国定公園となり、1928 年に国立公園に指定された。公園の面積は、145 km² (56 平方マイル) である。



ブライスカニオンのトレッキング

17 日～ 19 日

記・下河邊史郎

6 月 17 日

ブライスカニオンからラスベガスへ。6 日間の大自然のトレックから人口の歓楽の町ラスベガスまでの 450Km 程。ユタ州、アリゾナ州、ネバダ州と 3 州を股にかけたドライブの 1 日となる。08:00 レッドキャニオンの緑の草原、まるで軽井沢の様な爽快な朝、定刻に出発。緑の多い 14 号線ダッククリークの 2,900 m の峠を越え、09:40 セダーシティー着。典型的なアメリカの田舎町。高い建物は無く、緑多い町である。ここからラスベガスまで 15 号線、250 k m 程の荒涼たる砂漠の道のりである。

11:10 ユタ州からアリゾナ州に入り、サマータイムの調整で、時計を 1 時間バック。

10:30 メスキートで Mac に入り昼食。11:25 本日の目的地ラスベガスに向けて出発。周りの景色は相変わらずの砂漠。12:00 ころから、左前方につむじ風が幾つも見えだし、そのうちの 하나가、我々の車の前を横切る。ラスベガスのメイン通りを走り、両側に大きなきらびやかなホテルを眺めつつ、おとぎの国のお城の様な、今夜のホテル EXCLIBR に 13:20 到着。チェックイン後、MGM ホテルで行われているシルクド・ソレイユの Show を見る人は、早めに食事して PM7:00 からの Show を楽しんだ。



(ラスベガスの夜景)

6 月 18 日

07:00 ホテル出発。3 台のタクシーに分乗。ラスベガス空港へ。10 分ほどで空港着。US\$15.00 各人チェックインを無事終了。各自空港内でお土産を購入。サンフランシスコ経由成田に定刻通りに出発。

6 月 19 日

16:30 分 成田着。各自、10 日間の楽しい思い出を持って家路に向かう。

早月尾根からの剣岳

記・石原達夫

期日 平成 26 年 7 月 28 日から 31 日

参加者 吉永英明、醍醐準一、山村秀彦、石原達夫、高橋聡、横田昭夫

7 月 28 日

東京駅より上越新幹線、越後湯沢乗換え北陸線特急はくたか、魚津で富山地方鉄道乗り換えて上市に着く。月曜日とかで駅周辺の食堂は軒並み休みで仕方なく昼食はコンビニで買い込み馬場島までのタクシーの車内で済ませる。

3：00 前に馬場島の山荘に着く。ここには実に昭和 44 年の正月以来の訪問で、辺りがすっかり変わっているのには驚く。そういえば従来のバスの終点であった伊折には既に居住者がいなくなったとか、過疎化は急速に進んでいるようだ。

馬場島の宿泊施設は以前は山小屋であったが、今はモダンな山荘となり、更に周辺にはキャンプ場とその関連のリクリエーション設備が整備されている。

到着時には生憎と山は雲で隠され何も見えない。少し周辺の様子を見たり、風呂に入ったりしているうちに横田さんが車で到着する。

夕食時の 18 時頃には雲が切れ、剣岳が見えるようになる。ゆったりとした気分で夕食をとり、広々とした部屋で早めに床に就く。

7 月 29 日

朝 6 時の朝食を済ませれば、直ぐに出発となる。

6：35 に宿を出るともう強い日差しで、よく整備されたレクリエーション敷地を抜け、登山路の始まる遭難者の鎮魂碑に出る。逆光の大窓、奇怪なシルエットの小窓尾根が見える。登りは初めから大木の重なる急斜面で、木の根が露出し歩きにくい。所々に奇妙な形の杉の大木が現れるのが面白い。朝車で到着した登山者がゆっくり登る我々を追い越していく。聞けば日帰り登頂組も何人かいて、彼らは身軽に颯爽と登っていく。左手の展望が開けてきて、赤谷尾根の向こうに毛勝三山の猫又岳だけが大きく見え、その内に毛勝岳が雄大なその姿を現す。登山路は



(登山口の鎮魂碑)



(登り口より垣間見る大窓)

比較的良く整備されていて要所要所に標高を示す金属板が埋めてある。
今日の登りは、馬場島からの標高差 1440 米の早月小屋 2200 米であり、小屋に着くだけなので時間はたっぷりある。
とはいえ、我がパーティは通常組と、体調不十分の人を含む組との 2 つに別れてしまい、なるべく差は少なくしたいと思い通常組は長めの休憩をとったり、あるいは後から登って来るパーティに聞いたりして遅れ組の位置を推定したりして調整を図るがどうもその差は一向に縮まらないようだ。
問題のある登りではないし、遅れ組もベテラン揃いなので先に行くことにする。
やがて右手後方に大日岳が姿を現し、左手前方には小窓尾根のニードル、ドームが見えてくる。
この辺り眺めれば、もう半世紀以上前の青春の血を沸かせたクライミングや冬山の記憶が甦り、はるか遠くを見る視線となる。



(小窓尾根と剣尾根ドーム)

霧が出てきたようで右手には室堂乗越をスカイラインとする豊富な残雪の立山川源流、そのスカイラインをたどれば奥大日岳が過去の幻のように見える。
登山路を囲む木々が針葉樹から岳樺に替わり、追い打ちをかける様な急な登山路をあえぎつつ登れば、ヘリポートが現れ少し下ると早月小屋に 2：00 頃に到着する。
既に霧は濃厚となり遠方の視界は全く閉ざされている。暫く待ったが遅延組はいつ来るかわからないので、小屋に宿泊の登録だけして、外で飲み物等を飲みながら待つ。

やがて 3：30 頃、遅れ組が到着し、これを期に小屋内に入るが、案内された部屋は割と広い部屋で、別山ルート的小屋では考えられない我々だけの占有であった。5：00 の夕食後、宿泊者が外に出ているので、つられて出てみると霧が薄れていて、厳つい姿の小窓尾根のマッチ箱が見えるが、反対側の室堂乗越方面は鮮やかには見えていない。

7 月 30 日

5：00 の朝食の人数が少ない。朝食前に出かけてしまったようだ。我々も 5：20 には小屋を出る。体調不良の 2 名は、今日は登らず下山するとの事、高齢者登山では無理をしない事が鉄則である。
朝から快晴で絶好の登山日和を良いことにして、一気に 2660 米点に登る、ここで右手は東大谷と毛勝谷とを別ける左尾根がはるか下の立山川までチョンラピークのアクセントを付けて落ち込んでいるのが見える。

これから先は、岩稜歩きとなり、足もとのハイマツの間にはイワキキョウ、トウヤクリンドウ、ミヤマダイコンソウ、ヨツバシオガマ、イワカガミ、ガンコウランとうの高山植物が目を楽しませてくれる。途中下山してきた登山者が登山路で屈んでいるのでどうしたのだろうかと思わずそばに寄ったところ、雷鳥がすぐ傍にいたという。小さな孵ったばかりと思われる雛を抱えた母鳥であった。脅かさないように静かに歩く。

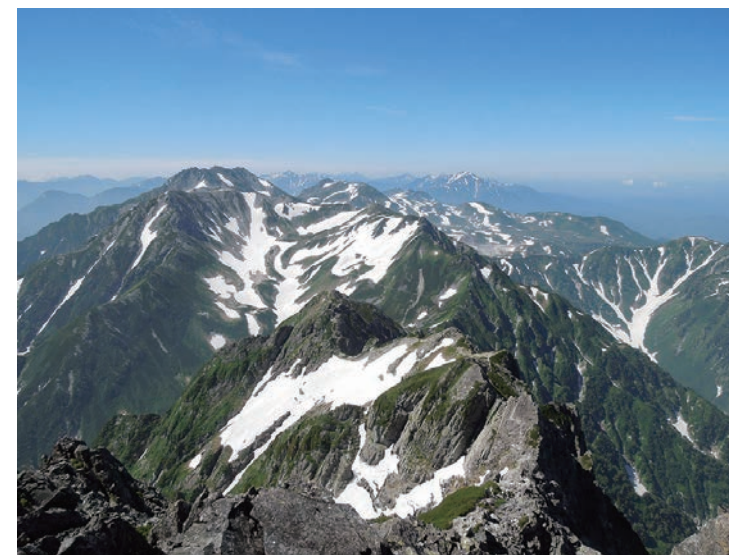


(うずくまる雷鳥)

2 か所ばかり残雪の上を歩きロープが出てくるとじき獅子頭でここからは待望の鎖場となる。左手は小窓尾根の手前に剣尾根が現れドーム手前には右股奥壁が、更に山頂に至る斜面には池の谷右股バットレスが連なる。右手に目を転じれば直下に東大谷コマクサルンゼ 2 本槍が見える。更に右には室堂から剣御前、剣沢のカールが手に取るように見え、別山尾根に登る点のごとき登山者も見える。足もとにオダマキルンゼを見てカニノハサミを過ぎれば、いよいよ頂上の一角に近づく。
頂上 (9：20) は別山尾根ルートで登ってきた登山者の群が占めていて、頂上達成感からか興奮したしゃべり声がかしましい。別山ルートから来る人たちは皆ヘルメットをかぶり、あるいはガイドツアーであろうか囚人の如くロープで数珠つなぎになって登って来る人たちもいる。



(ひたすら登る、獅子頭付近)



(剣沢)



(カニノハサミ付近の鎖場)



(八峰と後立山連峰)



(山頂は真近か)



(早月小屋と佐伯謙一氏)

目を転じれば八峰がよく見えるが、いくら目を凝らしてもクライミングのパーティは見えない。やがて源次郎尾根を登ってきた男女2人組が着く。聞いてみたところフェイスクライミングではなく、末端から登ってきたという。道理で9 m mシングルの意味がわかった。山頂付近では人が多く、そのうえ県の役人が何やら巻尺を伸ばしてあちこち測ったりしているので煩わしく、ついに3角点の確認できず、また新しくしたという剣神社の山頂神社も拝めなかった。

10:00に下山を開始する。下りはもうのんびりと歩く。直江津からの日帰りのご婦人が軽やかに走るように下っていく。登りの人はもう少なく、昨日テント泊りだったという若い朗らかなトレールランの男女2名が早月小屋発の人では最後で、あとは馬場島発の人達となる。面白いことに早月尾根から来る人でヘルメットをかぶっている人はほとんどいない。昼食を食べたり休憩をしたりしてゆっくり下り、3:20頃早月小屋に戻る。今晚は泊り客も少なく、部屋は替って4人だけの余裕たっぷりの小部屋となる。

7月31日

朝食後(5:30)直ちに下山に移る。

ただ昨日の登りで足を痛めたか、1人歩みが遅くなり、皆この人に歩調を合わせゆっくりと下る。暑い長い下りは10:40に馬場島に着くことで終わった。キャンプ場の洗面場で顔を洗い汗の塩を流すが、日に向かって歩いたので相当に日に焼けたようでピリピリとしみる。がらんとしたキャンプ場を望む、これまた客のいない山荘ではタクシーの来るまで、ビールとか飲みリラックスする。タクシーは馬場島山荘を12:10頃あとにして、登山の汗を流すため上市のアルプスの湯に向かう。私にとっては、何となくセンチメンタルジャーニーで、おそらくこれが最後であろう剣岳登山であった。

以上

檜枝岐から会津駒ヶ岳、燧ヶ岳、尾瀬ヶ原

記・石原達夫

期日 2014年9月16日ー19日

参加者 吉永英明、下河邊史郎、武田鞆子、西谷隆亘、西谷可江、山村秀彦、川村光子、石原達夫

9月16日

10時40分東武浅草駅発の会津田島駅直通の区間快速に全員乗車する。この電車は東武伊勢崎線ー東武日光線ー東武鬼怒川線ー野岩鉄道・会津鬼怒川線と順にたどり3時間17分後に目的地の会津高原尾瀬口駅に到着の予定だったが、鬼怒川温泉を過ぎたところで福島内陸を震源地とする地震に遭い、電車は安全確認が出来るまで一時運転休止となってしまった。

しばらくして電車は動き出したが、人の歩く程度の早さの超低速運転が続く。何と云う事はない保線係員が徒歩で線路の安全状況を点検しているのでそれより早くは走行出来ないということだった。野岩鉄道に入ると普通速度になったが、時すでに遅く会津高原尾瀬口に着いたのは14時50分頃、会津バスは少し待っていてくれたらしいが、我々が着く直前に走り去るのが見えた。次のバスは16時20分、タクシーにしようかと思ったがとても高いので、バスを待つことにし、それまで駅隣接の売店でスナックを食べたりして時間をつぶすことになる。やっと乗ったバスは延々と走るが、桧枝岐村までは遠い。トンネルを幾つかくぐり、桧枝岐村に近づくともスキー場や温泉設備とかが目に入るようになるが、過剰投資じゃないの、と心配になる。そんなにお客が来るのだろうか。村に入るとバスは随意停車なので今日の宿となる民宿かどやの玄関先で降ろしてもらおう。今日の宿は山想倶楽部で貸し切りだ。温泉に入ったあと、地元素材による夕食を楽しむ。

9月17日

宿の好意で早めの朝食の後直ちに出発。宿の車2台でバス停登山口の先林道2キロの滝沢口登山路の登り口まで送ってもらう。歩き始め(6:50)は、道路から手すりの付いた階段を登る。頂上までは標高差950米の登りだが、ブナの大木の林の中の登山道はいきなり急登の連続で、展望もなくただひたすら登る。

いい加減くたびれたところに少し広めのなだらかな場所があり、お休み処といった感じで登り降りの登山者が腰をおろしている。休憩していた2人連の山慣れた感じの若い女性は尾瀬みはらしの宿の従業員だそうで、昨夜は駒の小屋(山頂小屋)に泊まったとか、つかの間の骨休めだろう。



(滝沢口登山路)



(駒ヶ岳展望台からの風景)



(小屋を目指して)



(熊沢田代)



(広沢田代を見降ろす)

この少し先の水場降り口を過ぎるとやがて登山路は尾根につけられて緩やかな登りとなる。樹木もブナからオオシラビソに替わり少し展望がきくようになる。歩きやすい尾根道を行くと突然樹木がなくなり草地の展望台に出る。

目前には駒ヶ岳山頂付近のなだらかな山容があり、少し左上には2棟の山小屋が見える。草地のプロムナードを進めば山小屋のある池の平に着く。池の脇にあるベンチにザックを置き、なだらかな登山路をたどり、少し急坂を登って2134.5米の山頂に出る、予定時間通りの到着だ(11:00)。見渡せば近くに明日登る燧岳が見え、その後ろの至仏山までは判るが、この辺り是不案内であとの山々は残念ながら山名が分らない。ベンチに戻り昼食を済ませる。

(11:30 - 12:00) ついでに駒の小屋に行き内を見せてもらう。こじんまりしたしかし感じの良い小屋だ。帰りは一気に下り、登り口のパーキングスペース(14:10)に降り立ち、林道は途中ショートカットでバス道路に出る。

バスが来るまで1時間以上あるので役場まで歩く。吉永さんは早速役場に行きこの地区の状況調査をするとか、仕事の一環であろう。15時50分のバスに乗り、御池ロッジに着く(16:20)。立派なロッジで、温泉もあって気持ち良い宿だ。

9月18日

今朝の天気予報はあまり芳しくなく、早くも出発時刻には小雨模様となる。この状況を勘案し、燧岳登山組と、燧裏林道経由組とにわけ、それぞれに見晴らし(下田代)十字路の宿を目指すことになる。燧岳から十字路に直接下りる登山路みはらし新道は台風で荒廃していて通行禁止とのことなので、山頂から尾瀬沼に直接行けるナデッ窪を下り尾瀬沼に出るコースをとることになるが、



(下山、駐車場)



(一瞬の尾瀬沼)



(ナデッ窪入口)

頂上からの展望はガスのためゼロだが、ほんの一瞬だけ白く輝く尾瀬沼が思ったより近くに見えた。時間とルートの関係で最高峰の柴安岳はカットして、いよいよナデッ窪の下降に入る。確かに急峻で大きめの岩石がごろごろしているが、私らにはかえって変な急坂より楽な位だ。昨日駒ヶ岳で会った韋駄天のおばちゃんは1時間程度で下ったというので、それなら私らも1時間チョイでというつもりだったが、窪が緩い傾斜帯に入り、さてスピードアップというところで何と雨が強くなり岩が滑りやすく、慎重に下らざるを得ないので意外と時間がかかり、結果コースタイム通りの2時間で尾瀬沼尻に着いた(13:00)。ようやく雨は止み青空も現れてきたので、越してきた燧岳を見上げ、また沼を眺め、売店のコーヒーを飲んだり食事をしたりの大休止(13:45)。ここからは木道や栈橋の続く歩きやすい道をたどり、17時までに着けば良いか、の当初予定よりずっと早く十字路の桧枝岐小屋に着いた(15:05)。小屋では裏燧林道経由組と合流し、夕食までは風呂に入ったり雑談したりして過ごす。宿は他に若い男性2人組がいるだけでほぼ貸し切り状態だ。夕食後は疲れていたせいかすぐに寝てしまった。

別働隊 燧裏林道組の記録

この項のみ川村光子・記

朝から雨模様なので今日は燧岳と燧裏林道に分かれる。健脚揃いの吉永、石原、山村氏は6:30 燧岳を目指す。西谷夫妻、下河辺、武田、川村で、7:00 頃御池ロッジを出て、駐車場の脇を抜け長い木道へと入る。雨はシトシト降り足元の木道が濡れてすべるので気が抜けない。木道は東電のカラマツの木で作られ、7年ごとに取り換えられるとの事でした。上田代、横田代と山腹の中間部ではコメツガ、シラビソ等の針葉樹の森が薄暗く、森閑とした空気に包まれ、大きな空洞になった大木、根で石を抱えた古木が見られ、また足元には赤い傘のキノコが生えていた。ヤマトリゼンマイがあざやかに赤く色づき、もう草紅葉は見ごろで、ここ1週間くらいとのこと、木道下には、春に美しく咲いた水芭蕉の葉は橙黄に枯れていた。かわいらしい家紋のウメバチソウが沢山咲いており、チングルマの赤紫がかった白い毛はつややかに雨にぬれて美しい。今回は雨も降っていることもあるので、三条の滝はパスした。少し雨も止んだようなので、11:20 早いお昼を湯元温泉無料休憩所とする。近くにボッカさんが荷を休ませていた、70kg 前後は背負っているとのこと。12:45 ヨッピー吊り橋を渡り尾瀬ヶ原から竜宮へと向かった。ナナカマドやツタウルシ、テングカエデ等、紅葉の景色を楽しみながらゆっくりと歩く、濃いブルーのトリカブト、サワギキョウのコントラストがあざやかに咲き、風景がだんだん金色に染まる頃には、夏の終わりを告げるだろう。尾瀬ヶ原の池塘に色の濃い緑と赤味を帯びたヒツジクサがつやつやと光り、花芽も着いていた、ヒツジの感じがな草だが未の刻、午後2時には花を閉じるので命名されたとのこと。池塘を過ぎると、みはらしはもうすぐ、14:30 桧枝岐小屋に着く。



9月19日

今日は有難いことに天気がよさそう。少し遅めに桧枝岐小屋を出る(7:25)。沼尻川の橋を渡る頃にはすっかり晴れ渡り、最高の景色を楽しむことになる。ふり返れば遠くなった燧岳が、右手には屏風のような景鶴山、与作岳が、左手には富士見峠、正面にはなだらかな至仏山という山々が光る池塘をちりばめた一面の草紅葉の原を抱きかかえるように横たわっている。まばらな木立の中に佇む竜宮小屋を過ぎると原のど真ん中を歩くことになる。次第に趣のある池塘が増えてくる。至仏山の山容が大きくなってくると尾瀬ヶ原の逍遙も終わりに近づき名残惜しい気分だ。次第に趣のある池塘が増えてくる。至仏山の山容が大きくなってくると尾瀬ヶ原の逍遙も終わりに近づき名残惜しい気分だ。山の鼻に至り大休止(9:10 - 9:45)、小1時間の登りで鳩待峠に着く(10:50)。定期バスの停留所まで行くシャトルのジャンボタクシーは11:00の発車だが、1人2500円余分に払えば上毛高原まで行くとのオファーがあり丁度8人乗りなので受けることにする。タクシーの運転手はこれで今日の仕事は終わりということで、観光タクシーよろしく片品村の広くてのどかな高原地区に寄り道をしてくれる。途中の農産物販売所では30分ほど停まり、皆さん地産農作物を買い込む。タクシーは沼田を抜け細かい道を走って上毛高原駅に着く(13:00)。タイミング良く13:22 発の新幹線があり、全員乗り込み、今回の山旅を終えた。



(桧枝岐小屋)



(燧ヶ岳)



(至仏山)



(一休み)

八海山、再挑戦

リベンジどころか昨年のコピー？

記・日出平 洋太郎

期日：2014 年 10 月 4 日 (土) ～ 5 日 (日)

参加者：菊池武昭 (L)、石原達夫、高橋聰、廣島孝子、寺田正夫・美代子、小亀真知子、
日出平洋太郎 以上 8 名

コース：10/4 ロープウェー駅－女人堂－千本檜小屋－不動岳－地藏岳－千本檜小屋 (泊)
10/5 千本檜小屋－女人堂－ロープウェー駅

10 月 4 日 (土)

菊池 L の配布資料では八海山の鎖場は余裕を持って堪能するとあって、上越新幹線 305 号東京 7:08 発に乗らねばならない。7 時かと思ったが、逆算すると 5:15 には家を出なければならぬ。前夜は目覚ましをセットして寝る。

無事に指定の列車に乗り、高橋、廣島、小亀と合流する。参加者数の割には少ないが、夫々どこかに乗っているのだろう。上野を出たと思ったら菊池 L が現れた。上野から乗ったそうでこれで 5 人、残りの 3 人は指定席か。台風 18 号が接近中とのことだがまだ風はなく、どんよりと曇っているだけである。清水トンネルを抜けると地面が濡れていて、雨が降った形跡。しかし今は止んでいる。8:39 越後湯沢で下車。前方から石原さんと寺田夫妻が歩いてくる。これで全員揃ったぞ。我らは下りの在来線で六日町駅まで行くのだが、長岡行きが 8:59 で、待ち時間が 20 分もある。在来線のホームまで行ったが列車は未だ来ていない。今日と明日の弁当を何処かで買わねばならないのを思い出し、改札口まで戻り、途中下車してナイスデイでお握りと飲み物を調達する。長岡行きは定刻発車、六日町には 9:22 到着。駅前の八海山スキー場行バス 9:30 発、バス代 420 円。30 分ほどでスキー場前着。ロープウェー山麓駅はバス停から少し高い所にあり、その間は歩かねばならぬ。怪しげな空模様だが、雨は降っていない。

ロープウェー山麓駅に着いたら、会計の小亀さんに会費 1 万円 / 人を徴収される。81 人乗りの大型ロープウェーは 20 分ピッチ、往復 2 千円 / 人だが、菊池さんは何処かで 1,850 円の割引券を手に入れてきたらしい。10:20 発のロープウェーに乗る。全長 2217m、標高差 771m を一気に駆け上る。

所要 8 分で標高 1,147m に到着。いよいよここから登山開始である。



(日出平 洋太郎さん)

雨着を用意したり、上着を着たりと、夫々が思い思いの支度をしていると高橋さんが「お先に」と一足先に出発する。それを追って 10:36 残りの 7 人が揃って出発。順番は自然に前から石原、廣島、寺田夫妻、小亀、日出平となり菊池さんはスイーパー。11:08 四合半出合 (大倉口分岐)。朝から雨だったのだろう、登山道は濡れていて水の流れている所もある。最初は今にも降り出しそうだったが、しばらく歩いているうちに、だんだん晴れてきた。赤土でグチャグチャの道は滑りやすくて歩き難い、晴れてくれれば有難い。11:29 五合目 11:35~37 休憩。見上げる前方の急斜面の途中にさながら鷹の巣の如く、女人堂の屋根が聳えている。12:10 女人堂着。先着組より 10 分くらいは遅れただろう。ここで昼食、先着組はもう食べ終わったようだ。12:30 女人堂を出発、13:59 薬師堂は霧の中。

14:15 千本檜小屋着。菊池さんの計画より小 1 時間遅れた。天気は悪いし、計画通り今日中にハッ峰のうち五峰をこなそうとするのは無理である。菊池、石原、高橋が何やら相談し、着替えなど不要のものは残し、行けるだけ行ってみようとなる。14:35 出発、固定ロープを伝ったりして 15:01 不動岳着。

ガスって先がどうなっているのか見えないが、石原さんが行っては駄目ときつく云う。さればと写真だけ撮って、行きがけならぬ帰りがけの駄賃で 15:15 地藏岳にも足跡を残す。

今日はこれでお仕舞いである。15:45 小屋帰着。夕食には間があるので寝床を敷かんとするも、神殿の広間の半分を占拠している先客の 4 人のオバンは厚かましい。こっちは 8 人だから少し詰めてくれと云っても、四の五の云って埒があかない。管理人を呼び出して調整してもらおう。3 人寄れば姦しいのに山ズレ女が 4 人もいては我が淑女？たちでは抗すべくもない。夕食は 18 時からでカレーライスにお新香。2 階の客まで含めれば 20 人位の客に管理人一人で賄うのだから贅沢は云えない。



(薬師岳手前にて)



(薬師岳頂上にて)



(地藏岳登路)

10月5日(日)

朝起きて外を眺めても、霧が流れているだけで昨日とあまり変わらない。風がなくて妙に静かなのが、嵐の前の静けさのようで不気味である。6時朝食。ゼンマイなどの山菜の煮付けに茄子の炒め物、それに味噌汁と一汁二采、昨日の夕食より豪華である。一泊二食で＼6,500、北アのホテル並みの山小屋よりはるかにいい。

高橋さんがガスが晴れねばどうにもならぬとか云っていたが、結局雨が本降りにならない内にさっさと下山することになる。

7:15 出発、8:30 女人堂で一息入れる。9:15 コギ池に寄り道、モリアオガエルの生息地。池にオタマジャクシが沢山、冬も近いのにまだオタマジャクシ？水溜り程度の浅い池だから冷えれば底まで凍ってしまうだろうに。池の底の泥に潜って越冬するのだろうか。10時頃からポチポチと雨が降りだした。急いで 10:20 ロープウェー山頂駅着。10:40 発の下りのロープウェーに乗る。昨日は 10:20 山麓駅発のロープウェーで上ってきたのだから丁度 24 時間山の上に居たわけだ。10:46 ロープウェー山麓駅着。バス停前まで下り、六日町駅行のバスを見たら次は 11:45 である。土産物を物色し始めるのもいるが、昼飯が先だ。菊池さんが次のバス停まで歩けば美味しい蕎麦屋があると云うので雨の中を歩け歩けである。11:20 八海神社境内の八海会館でザル蕎麦や天蕎麦をてんで注文する。酒も八海山があると云うので、これは寺田さんのおごりでゴチになる。食後は立派な八海神社に参拝し、12:37 ジャンボタクシーで六日町まで。上越線 13:29 発で越後湯沢へ。昼間だから空いているだろうと楽観していた新幹線は、台風 18 号の襲来前に帰ることにした人で一杯、混んでいて座席はてんでんばらばらになった。菊池さんと日出平は先頭車両まで行って、チビチビやりながら帰った。

今年の会報を見ると八海山山行は 9 月 14~15 と今年より 3 週間早い。しかし台風の影響を受けたのは全く同じで、2 年続けて二日目は何もせず、真っ直ぐ帰っている。しかも台風は同じ 18 号と、念のいったことである。違ったのは、今回は初日に八ッ峰のうち、不動岳と地藏岳を登ってきた点だけである。リベンジというにはほど遠かった。

奈良の二上山、葛城山等の史跡巡り

奥大和の里山と野辺の古刹を訪ねて

～皇紀 2674 年の御世に光あれ～

平成 25 年師走

記・石岡慎介



(葛城山での集合写真)

参加者：武田 頼子（企画）、高橋 聡、石原 達夫、吉永 英明、西谷 隆亘

西谷 可江、広島 孝子、永田 由紀子、石岡 慎介（随想）

この国が歩み、営々と育んできた命のひかりがクラブライフにもつながり、歴史の山旅がまた巡ってきた。1300 年という悠久の時に身を置き、若き日々の健常を想うと静かな感傷がある。秋熟晩成の 11 月中旬、知立の女性岳徒のおかげで奈良西方に 2 名山を訪ね、シルクロード東端の古道を歩く。山里は刈り入れも終わり、静かな柿日和であった。

16 日（日）山仲間と近鉄御所の出会いを楽しみに大阪南河内に単身足を運ぶ。7 世紀に活躍されこの国の精神文化の礎となった聖徳太子ゆかりの地である。太子町名はいつごろからか不明だが、法隆寺、四天王寺にくらべ PR 不足をなげく役場の方が上ノ太子駅で迎えてくれた。観光課準備の資料をいただき、「磯長山叡福寺」へ送ってくれた。この御廟は三骨一廟と言われ生母の皇后と太子ご自身、同妃の棺が納められる香り立つような名刹であった。太子は生前にこの地を墓所と定められたが、太子を摂政の宮として任命し、太子から仏教講話を受けられた日本初の女帝第 33 代推古天皇が太子の死後建立し、聖武天皇が伽藍整備をしたほどの大切な史跡なのである。信長兵火で焼失後は豊臣秀頼が再興している。今年の旅で曾我入鹿首塚と出会ったが、なんと聖徳太子の子山背大兄王を皇位に就かせないために、殺害するという暴挙に出た史実の入鹿である。

山里はミカン狩りのシーズン最中で、小粒だがコク深い実りをチョイいただいた。

太子廟を起点に父上の第 31 代用明天皇、推古天皇御陵、遣隋使として三度も渡航した外交使節の小野妹子墓を経て、大化の改新後即位された第 36 代光徳天皇陵“うぐいすのみささぎ”に詣でる。現在の池坊流華道につながる妹子の末裔を示す大きな石柱には驚いた。たっぷり夕暮れまで歩き回って竹内街道に出た。6～7 世紀には難波大阪と奈良を結び飛鳥へ至る日本初の官道である。太子町からは仲間と登る二上山を越え、葛城にいたる古道となっているが、黄泉の世界は政治の中心飛鳥からかなり隔離した立地が考えられていたようである。

土産物店で葛もちをいただいていると「昨夜まで天皇皇后様が橿原に二泊され今日は三輪山、そのあと吉野川上に向かうそうです」と女将が語ってくれた。祭祀の主として老軀に鞭うたれる両陛下とめぐり合わせ、平成の巡幸「国見」に女将も感無量であった。

翌朝 17 日（月）橿原神宮に出向き紀元 2674 年を寿ぐとなにか清々しい。孫への土産といえば、「まんが神武天皇」だが、一大発見する。日向国から海路河内国へ向かった皇子は、そこで荒くれ者たちの抵抗に遭い、南下して紀州の国から上陸したという。和歌山にいまある「新宮」市の由緒もうなずけてくる。神武天皇のご本名は、カムヤマトイワレビコのみコト（神倭伊波禮毘古の命）とあった。

12：30 8 人の仲間と御所で落ち合う。葛城ロープウェイ下まで奈良交通を使い、登頂開始。北尾根コースは見るからに急登なので、リーダーは櫛羅の滝を経由する行程をとる。クジラと読む由来は不明だが、圧倒的な杉植林帯で薄暗く趣もなにもないが、滝は端正な景観であった。黒ゴマ点々に満ちた花崗岩土壌の山峰に気づく。台風の影響か山体崩壊痕は随所にあったが、むやみやたらな人口植林の為だろうか、弱い地盤で木道階段の長丁場である。歩程 3 時間ほどで奈良と大阪を 360 度展望できる山頂に着く。



（葛城山頂宿舎前）

その夜は芒が原の「葛城高原ロッジ」に入るが、貸切りのようでユツタリ。熱燗に合鴨の鍋に舌鼓を打つ。鴨肉の歯ごたえと出汁は絶品で、聞くと岩手鴨とは育て方が違うと自慢気だった。18 日（月）早朝葛城山に別れを告げ、標高差 300 ㍎を一気にロープウェイ下山で 6 分程。奈良盆地や大和三山を眼下にモミジの黄葉、真紅のドウダンツツジに気付いた妙齢女人が「どうだん私を見てよ！」と讃える。女性リーダーは、葛城で忘れてならないことに触れてくれた。修験道の祖「役行者」がこの地で誕生して、葛城山野を飛び回って鍛錬し、その後吉野から熊野大峰へと駆け巡ったという伝説だったが、我らが山歴にもつながりうれしかった。葛城古道に入ると、古事記や日本書紀で伝承される道辺の寺社や史跡めぐりである。のどかな田園と舗装路を繰り返しタツプリ 6 時間は歩かせてもらう。この道は奈良盆地から大阪金剛を経て葛城連山の山裾を南北に走る大道となっており、この国が成り立つ神話と信仰の原風景が連なっていた。



（九品寺 千体石仏）

わっても、戦乱に消えた命も、魂は永遠に息づいている。来年は戦後 70 年の節目、なんと民間、軍属で 300 万有余にもなった天上の御魂をよもや誰にも無にはしえないだろう。第 125 代今上陛下は皇后さまと来年再び遠い玉碎の島に渡られる。

法然さんが詠んでおられた。花のうてなとは蓮の花、その上に留まる水一滴。心の平安をいただく時こそ人生なのか、はかない身であればこそ今この一瞬を大切に生きる山想人であった。

露の身はここかしこにて消えぬとも心は同じ花のうてなぞ（法然上人）

高丘の宮跡にはいる。初代神武に続く綏靖天皇の皇居として伝承されている野辺の史跡である。大正 4 年の碑を見たが、日本誕生の国威発揚を物語る一章として古事記伝承を具現しているのだろう。南北朝時代の武人北畠親房の「神皇正統記」を読むと、「大和の葛城高岡の宮」とある。次いで「一言主神社」本殿に参拝。雄略天皇のお狩場一帯だったところと伝えられ、この辺りで一事主神に出会って、大悪の大王が有徳の天皇に変身したという。生身の人間として願ひ事はたくさんあってもダメで、原初信仰の社では一言の願ひならかなえてくれるそうだ。地場の産業振興には苦勞の痕を感じるが、杉の木桶の香が懐かしい醤油や麵ツユの店に立ち寄る。どうもこのあたりでは棚田農法で雑草除去に役立っている「倭鴨」が名物らしい。十分運動させているから肉の歯ごたえは前夜十分に楽しんだ。

「長柄神社」は大国主命の娘下照姫がご祭神。天武天皇も行幸された由緒正しき神社で日本書紀に記述があると立札にある。次は「高天彦神社」となる。天孫降臨の伝承碑があり、この国で最初の神が鎮める社で参道の老杉は味わい深い。古代豪族葛城氏の最高神だが、境内には歌舞伎演目ともなっている「土蜘蛛」



（葛城一言主神社）



(高鴨神社)

が埋葬されていた。土蜘蛛とは天皇に刃向う賊軍の喩えなのか、先住民への蔑称なのかわからなかった。

神社参拝はまだ「高鴨神社」へ続く。3000年前の弥生中期から祭祈の中心となっており本殿で旅の安全を祈願する。京都加茂大社をはじめ全国にある賀茂社の元締めとかで鴨族という豪族発祥の地とある。神道につながる国体の散策路がこう続いても、「神は父、仏は母」のこの国ではアメリカ流にいうなら“ゴッダ ブレス ニッポン”ともなるのだろうか想った。

こうして4時ころ古代ロマン、神話の舞台を現代に残すキツイ散策が終わり、迎えのコーチにピックアップしてもらう。約10キロ、5時間行程27000歩は、平均73歳高年世代にとっては救いの神である。宿泊所「葛城の森」に入り湯船で安堵の息をついた。

19日(火)最終日何十年来憧れの的だった里山と寺社が組みこまれていた。リーダーより彼岸と此岸の境にあると案内された「二上山」と有り難い極楽寺で有終の美を飾る。山麓まで送ってもらうが、バスの中遙か遠くから眺めればラクダの背の様な山波である。恋人同士、家族ハイク、老夫婦に出会うが、おそらく奈良県下で最も愛され慕われる里山ではないかと実感した。さしみ竹林を養生している穏やかな老人と会話しながら風雅な山門をくぐる。

「雄岳」(517㍎)、「雌岳」(474㍎)は双耳峰みたいである。北の生駒、信貴山系と南の葛城、金剛山系をつないでいるが、大阪里山へと来年の夢舞台はひろがる。占優植生は圧倒的に落葉広葉樹で植林は許されなかったような貴重な里山にも思えた。地質は粘盤岩や凝灰岩からなり、切り出された岩石で石室、石棺を巡検できた。旧石器時代はサヌキ石が槍、矢じりの石材産出地として、またどこかの神社では東北産の翡翠交易の紹介もあり、まさに太古から中世にかけて人と自然と文化が融合する集積地のような山麓だった。

いよいよ大津皇子の陵墓に向かう。五木寛之、白洲正子、深田久弥、立松和平、里中満智子氏など多くの文人墨客が虜になってしまうほど小説、随想、漫画が花盛りである。第40代天武天皇の第三皇子として勇敢、聡明な資質が逆に疎まれ、皇位継承の争いなのか謀反の罪を着せられ死罪となる。天武の死後、お妃だった皇后さまが持統天皇として第41代を継承される。ご自身の皇子を次世代として望まれる母心に対して、病弱な草壁自子は即位できずその御子のお孫さんが第42代文武天皇となられたのは歴史の皮肉である。

皇子の姉大伯皇女には弟の死を嘆き悲しみ、その魂が二上山へ還って山に化身したような永遠のいのちの慟哭を詠まれる・・・朝廷権力の犠牲になったわが弟よ、無情な世の中、私は人として明日からは「ふたがみやま」を皇子の代わりとして見て生きてゆけばよいのでしょうか・・・と万葉集に伝わる。

JAC 大先輩深田久弥氏は、50年前帰天して3日後に志げ子夫人が代理出版された最後の著「百

名山その後」で、大津皇子の辞世の歌に触れられた。

ももづたふ盤余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ (大津皇子)

・・・いわれの池で鳴いている鴨を今日を限りと見納めながら、私は雲に隠れ去って死んでゆくのか・・・と死を命じられた24歳男の本懐として、人生勝てば謙虚に、敗れても健気に、潔く死地に赴くのだろうか。清廉潔白な自分を信じ切って彼岸の旅に出た人品骨柄こそ今も愛される所以なのだろう。照葉樹の小高い土盛り陵墓を一回りしてから厳粛な面持ちでその場を離れた。

「雌岳」頂上に向かうと「太陽の道」として自然科学の謎解きのような日時計が置かれていた。古都箸墓を中心に淡路から伊勢に通じる北緯30°20分の東西線に社寺遺跡がつながっているというのである。この国の古代祭祀の太陽信仰からもうなずける証左であった。

旅の仕上げは、「當麻寺」と「西南院」である。

1300年前に聖徳太子の弟君磨呂子親王が創建された名刹である。極楽の地とはさもありなんとばかり善男善女で賑わっている。調べると古代豪族當麻氏はこの一帯を本拠とし、葬送儀礼役を任務としていたようで飛鳥からみて陽の没する方に貴人陵墓が多いのもうなず

けた西南院では無数の景石に寄り添う色変えぬ松、紅葉黄落の極楽浄土の風情にしばし心遊ばせてもらった。

極楽をいづくと問わば大和なる麻呂子の里にゆきて尋ねよ (ご詠歌)

法然上人が唱える念仏者の極楽願いなのか、樹下石上が己の安らぐ居場所なのか、櫻花爛漫の當麻寺をイメージしたが、80歳代になっても再訪したいな～と思わせる極楽の地である。途中で相撲開祖の地の塚にも出くわしたが、古代河内の荒くれどもは、天覧試合のキャラでもあったと初めて知った。

こうして往く秋を惜しむように大和紀行は終る。お蔭さまで女性リーダーは上手に歴史を思い出させてくれた。先輩岳人は『温故知新』の旅と喩えていた。「歴史を知る」とは、“古え人の口振り、手ぶりが見えたり聞こえたりするような心の体験をいうのだ”という小林秀雄の名言が思い起こされた。

道辺の甘柿をチョイといただいては食らいつき、昼食は柿の葉寿しとニューメンで仕上げ、残り世を生き抜く極楽が有難く、万葉まほろば線に乗って全員無事に帰路についた。

柿食ふや命あまさず生きよの語 (石田 波郷)



(二上山 雌岳山頂の日時計)

忘年山行（蕎麦打ち体験と武川岳登山）

記・西谷 可江

日時：2014年12月13日（土）～12月14日（日）

場所：13日 武州中川駅側の蕎麦打ち道場「あらかわ亭」（蕎麦打ち体験後、浦山山荘泊）

14日 武川岳登山：コース浦山山荘～登山口～妻坂峠～武川岳～焼山～二子山～
芦ヶ久保駅

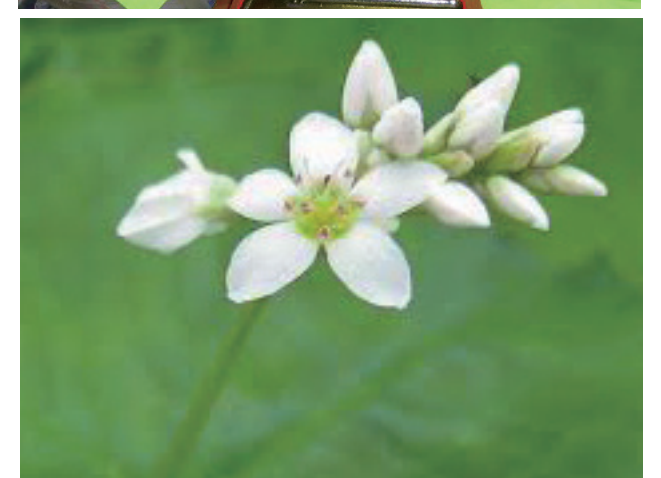
参加者：石原達夫、石岡慎介、大塚幸美、小笠原辰夫、小亀真知子、下河邊史郎、高橋聡、
武田頼子、寺田正夫、寺田美代子、日出平洋太郎、廣島孝子、西谷可江

12月13日〈土〉

強い冬型の気圧配置が続き12日は北日本の日本海側を中心に雪が降った。「衆院選投票開票日の14日にかけて北日本から西日本の日本海側を中心に雪が降る見通し。13日は太平洋側でも積雪の可能性あり」との気象庁の予報は気になるが、空は青く、畑の薄霜は朝日にきらきらと輝いている。青梅線の車中から真っ白の富士山が見えた。

西武池袋駅10:30発「秩父11号」に乗車された10名の方と、所沢駅で私は合流した。事前に往路の乗車券をまとめて購入してくださっていた高橋さんに感謝。西武秩父駅11:48着。商店の並ぶアーケードを歩いて御花畑駅へ。普段、土・日曜日は運転するS・Lは、ボイラー点検のため本日は走らず残念。「秩父路食べ歩きハイキング」のポスターを見ながら「登山は止してこっちに行きましょうよ」と甘い囁きが聞こえる。12:15発、秩父鉄道に乗車。10分で武州中川駅着。「そば処」の幟が風にはためく駅前広場には、妙高から車で来られた小笠原さんの姿が見える。駅を出たところに目当ての蕎麦道場「荒川亭」はあった。入口に「奥秩父荒川産そば利用店」の看板が掲げられている。長テーブルの並んだ畳敷の食堂に続いて板敷の広いスペースには既に蕎麦打ち台と諸々の道具、材料が用意されている。

4人一組で、我々3グループと他に男性3人の1グループが2人の女性指導者に教わりながら蕎麦打ちに取り掛かった。まずは「水回し」。私のグループの高橋さんは流石！！普段の料理の手腕を見事に発揮され、見惚れるばかり。蕎麦打ちは体温と室温に影響されとのこと。次に「こね」。立膝で上半身の重さをかけながらの作業である。のし棒で「のし」て、畳んだ蕎麦を「切る」。煮えたぎる湯にパラパラと入れ、皆で35まで数えて茹であがり。冷水にとって出来上がり。壁に掲げてある「そば3たて」（ひきたて・うちたて・ゆでたて）を見ながら、まさに「3たて」の、しかも自分たちで打った格別の美味さに、供された天麩羅と共に至福の昼食となった。満足、満足で今夜の宿「浦山山荘」へ向かった。



（蕎麦打ち体験）

足を痛められた石岡さんは、近くの医院で受診後、帰途に就かれた。一日も早い快復を皆でお祈りするばかりであった。

宿に向かう途中、秩父霊場第29番笹戸山長泉院にお参りする。ここ荒川村は「枝垂れ桜」と「蕎麦の里」で名を知られ、道すがら落葉した枝垂れ桜が沢山見られた。山想倶楽部では、2011年春、この地でお花見山行を行ったと聞いている。

15:00 過ぎ 宿着。18:00 の夕食まで一室に集まり、皆でティータイム、入浴で寛ぐ。夕食時、臨時例会。石原代表から 2015 年前半の山行計画の概略について説明があった。皆で、早くも来年の山行への熱い思いを語り合った。

12月14日〈日〉

6:00 起床。今日も天気恵まれそうではとほっとする。7:00 より朝食。宿の女将さんから「杓子菜」の御漬け物をお土産に頂く。温かいおもてなしにお礼を述べ、8:00 宿の車で武川岳登山口へ向かう。遠方の山々はうっすらと雪化粧。途中コンビニで昼食の調達。8:23 横瀬駅着。既に到着の大塚さんがここで合流。大塚さんの参加で「平均年齢、下がったねえ」「いや、プールに薬缶の水を注いだくらいだ」とかなんとか賑やかな車中である。小笠原さんは、私営駐車場にご自分の車を駐車される。8:28 出発。武甲山は石灰採掘で白い山肌を見せている。工場からセメントを焼く白煙が立ち上り、車道は零れたセメントで真白である。枯芒と霜の降りた道を車は登山口へと向かった。

8:44 一の鳥居着。駐車場に「武甲山」の標識がある。ここで宿の車と別れ、妻坂峠への林道を進む。日蔭の緩い登り坂は寒い。9:02 林道を横切り、沢音を右に聞きながら石ころ ごろごろの細い道を上る。9:48 妻坂峠(839m) 着。

眼前には朝日差す武甲山が、右手眼下には秩父の里が見える。「武川岳へ急な登り坂約 50 分」の標識あり。小休憩の後、10:00 武川岳に向け出発。「ほっぺに冷たい風が上がって来る感じ」と呟く声。日差しあるも、うっすらと雪で白い山路を途中、秩父盆地を見ながら歩く。10:35 武川岳(1051.7m) 着。10:57 第2グループ着。展けた山頂から、冬霞の中にうっすらとスカイツリーが見えたようだ。集合写真を撮って 11:06 出発。落葉道を下る。山ガールに出会う。半袖とは流石に若い。



(妻坂峠)



(武川岳山頂にて)



(ようかんの配給中)



(石原さん山座同定中)

11:24 蔦岩山(1004m) 着。ここで暫し休憩。12:00 焼山に向け出発。12:18 焼山(850m) 着。山頂では若者グループ数人が昼食中であつた。展望が素晴らしく石原さんの説明で山座同定。眼前に武甲山、秩父盆地。左方に両神山。遠方に榛名山、赤城山。暫し眺望を楽しんだ。第2グループが到着し、昼食。右前方にこれから目指す二子山が見える。集合写真を撮り、些かの疲れも面には出さず、いとも爽やかな表情の我ら 12 名、12:45「近くて遠い」最後の目当てに向けて、いざ出発。

1:38 二子山雄岳(882.7 m) 着。上り下りを繰り返し、1:46 二子山雌岳着。第2グループは 2:03 着。ここに標識の表示 2 ルートあり。「芦ヶ久保駅へ約 1 時間 30 分。尾根を歩く道。急な下り坂あり」「芦ヶ久保駅へ約 1 時間 10 分。沢道を下る道。急な下り坂あり」と。皆で相談した結果、早く着く沢道を選ぶ。2:06 出発。標識通り急坂で、ロープが張られ、ターザンごっこよろしくロープを掴んで後ろ向きで下る。私は先導の石原代表の歩き方をお手本にしながらスリル半分、恐さは嘸気にも出さず何とか通過。疲れた我が足、このところの運動不足を反省しつつ駅まで下った。皆さん、平気な顔である。寺田夫人は駅前広場を「寒さ飛んでけ」とばかりにランニング。皆様、流石、健脚揃いです。第2グループの到着を待って、駅のホームで小笠原さんと別れ(小笠原さんは翌日、両神山に登られたのでした。) 15:48 発の電車で帰途に就いた。

蕎麦打ち体験と共に天気にも恵まれ素晴らしい「忘年山行」終了。

来年も元気で、揃って山行ができますように！石岡さんの一日も早い快復を祈りつつ。



(焼岳山頂)



(二子山へ向かって)

新年会報告

記・高橋 聰

日 時：平成27年1月14日（水）午後6時～8時50分

場 所：飯田橋「かくや」

出席者：石原達夫、菊池武昭、高橋聰、下河邊史郎、日出平洋太郎、醍醐準一、田矢八束、寺田正夫、寺田美代子、吉永英明、西谷隆亘、西谷可江、小亀真知子、大塚美幸、中河秀利、平井喜久枝、廣島孝子

開会に先立つ4時30分頃川井さんが本日出席予定だったのだが、どうしても出席できなくなったので参加者の皆さまに渡してほしいと言われ、ご自分と奥様が撮った写真が入っている素敵な卓上カレンダーを持参して戴きました、数も丁度参加者の数が有り、大変助かりました、誠に感謝いたします。

高橋 聰の司会により定刻を少し過ぎた18:05分頃より始まり、2月実施予定のスノー合宿、3月実施のカナダスキー、同じく3月末実施予定の北八ヶ岳、4月予定の奈良の花を求めて名所、旧跡を訪ねて、6月実施予定のギリシャ（オリンパス山登頂とクレタ島イデ山登頂）の計画を石原代表から説明があり、続いて乾杯となった。参加者全員顔見知りなので自己紹介することなく、非常に和やかに実施された新年会も20:50分にお開きとなった。

本日の料理はデザートのアイスクリューをいれると、先付として鮭のマリネ風、牡蠣のスープ仕立て、お刺身4種、鰯の焼き物、ピザ、食事として焼きおにぎり（柚子胡椒入り）、お吸い物、デザート黒蜜入りアイスクリュー等の8品も出て大変ごちそうになりました。

これで飲み放題で6,000円でした。料理はおいしいのだが、少し狭いのが気にかかるそうです。

石原代表挨拶

山想倶楽部の皆様明けましておめでとうございます。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

昨年の山行の幾つかは悪天候のため中止となったものも有りましたが、実行された山行では参加者一同、和気あいあい、楽しい山行となりました。

今年も皆様のご協力を得て、シニアにふさわしい山行を計画したいと思います。

夏には、昨年はアメリカ北西部の国立公園をめぐる山旅を行ったので今年は趣向を変えてギリシャのオリンパス山とイデ山に登りたいと思っていますので皆様振ってご参加いただけますようお願いいたします。

改めて申すことではありませんが、山想倶楽部は山を楽しみ、人の和を楽しむ人たちの集まりであり、ここでは一切のエゴやポリテックスは存在しません。

それでは今年も山登りでシニアライフをエンジョイしかつ健康増進に努めましょう。

赤倉スノー合宿



（新赤倉 ユアーズイン入口前にて）

記・武田鞆子

2015年2月21日（土）～2月23日（月）

場所：新赤倉 ユアーズイン

参加者：石原達夫、下河邊史郎、横田昭夫、醍醐準一、田谷八束、西谷可江、高橋 聰
武田鞆子

2月21日

今年は列車等の連絡もスムーズに妙高高原駅に着き、小笠原さんの出迎えを受けてユアーズ・インに着く。休憩の後西谷さん、田矢さんと宿の裏手の川沿いにスキー場までスノーシューハイクをする。今回初めて買ったスノーシューの足慣らしが出来て嬉しかった。スキー場前の店でお茶をして、のんびり宿に帰ってくると、道路状況が悪く遅れていた関東組もボチボチ到着していた。温泉で暖まりお楽しみの夕食の席に着いた。

ところがTさんの言葉の呂律がおかしくて、食後も直ぐ椅子にもたれて寝てしまう。皆おかしい、おかしいと言いついて、もうこれは病院に行った方が良くと言う話になる。土曜日なので救急車を頼んで、高田の病院に2名が付き添って搬送される。残った人は一部屋に集まって心配(?)しながら、お酒を飲んだり、お菓子を食べたりしながらお喋りをする。随分遅くなって帰ってきたが、それほど事はないと言われたと本人はしれっとしている。それでも周りが心配して次の日は朝食後には帰って、すぐに東京の病院に行くように言われていた。

22日(日)

朝食後、Sさんの運転でTさんは帰って行った。Dさんは昨夜飲み過ぎて二日酔いか？。スキーもスノーシューもしないで、温泉に來ただけなのだと云って、又寝ると云っている……。残った5名と小笠原さんと杉の原スキー場に行き、リフトで一番高い所に行き、そこでスキーをする石原さんと別れ、スキー場の隅っこを小笠原さん横田さんのスキーの先導で歩く。コースをいくつも横断し、森の中を歩き適当なところで昼食。今日の天気は朝方は晴れていたが、今の所薄曇り。それでも早めに同じ道を引き返す。妙高山はくっきりと見えているが、黒姫山は笠雲を冠っている。これは雨の兆候だろうか。下へ降りてみると、一人でスキーしていた石原さんは、今日は気温が高くなってしまい、雪が腐っていて、スキーがあまり滑らないので面白くないと言って、既にスキーを中止して私たちが降りてくるのを待っていた。宿について着替えをしていると、窓に雨粒が当たりだした。ああタイミング良かったねと西谷さんと言い合う。

温泉で暖まりはしたものの、今夜の夕食は6人だけなので、なんだか寂しい。

23日(月)

朝から雨。朝食中に相談して結局全員帰ることになった。ハプニングの多い合宿になったが2日間晴れて有難かった。後日聞いたところによるとTさんの様態がおかしかったのは、前夜なかなか眠れなくて睡眠導入剤の飲み過ぎで、一時的に脳神経回路の異状を起こしていたらしいとの事。重大な病気で無く一安心。お大事に…………。



暖炉の炎でくつろげる温泉宿
ユアーズイン



(ダイニング)



(トリプル)



(温泉)



(お料理)

Canadian カナダ・サンシャインビレッジを滑る Rockies

サンシャインビレッジスキー場、周りの風景



カナディアンロッキースキー7日間

記・高橋 聡

期日平成 27 年 3 月 12 日より 18 日

参加者 石原達夫、石原泰子、高橋文雄、廣島孝子、下河邊史郎、高橋 聡、
後藤早登、三森文男、三森礼子、 添乗：山田功 合計 10 名

3 月 12 日 (木)

いつもなら成田に行くのには、京成上野より京成スカイライナーで成田に行っていたのだが良く調べたら、最近は路線が色々と便利に接続されるようになっており、自宅近くの飯田橋より地下鉄東西線に乗り、日本橋で羽田、成田間を走っているアクセス特急に乗り替えて行った方が、料金も二千円近くも安くなり時間も変わらないことに気が付く。
成田集合時間は 16:30 であるが飯田橋を 13:32 に出ると成田には 16:00 前には着くのでそれでいく事にして 14:20 に家を出発する。日本橋で乗り替えて浅草線のホームに着き少し待つと予定通り成田行きの電車が来たので乗り込み、成田第二空港駅に到着。本来なら第一空港ビル迄行かなければならないのだが、第二空港ビルで下車してしまい、待ち合わせ場所である 4 階に行こうとすると 4 階はレストランの表示となっている。おかしいなと思い近くに居た警備員に聞いてみると AIR CANADA 便は第一空港ビルだと言われ、あわてて直ぐに来た電車に乗り、何とか待ち合わせ時間の 16:30 に間に合うことが出来た。待ち合わせ場所に行くと既に参加者は全員到着している。僕はスキーを宅急便で送っているので、スキーを受け取りに行く。これで全員参加メンバーもそろったことになり、早速搭乗手続きだ。搭乗手続きも無事に終わり AIR CANADA の乗り場に向かう。このボーディングゲートが一番奥の方でとても長く 10 分程度歩いた感じだ。免税店で高橋文雄さん、下河辺さん、と僕の 3 人がカナダで飲むウイスキーを買おうとしたら、カナダのバンクーバーではカルガリーへ乗り継ぐ時に手持ちの水分は没収されると売り場の人に教えられる。残念だが仕方がない。無税のウイスキーであっても売っている価格は国内のデイカウント店で売っている値段と比較すると消費税が違っただけで本体価格はほぼ同じようなものだ。

やがて予定通り 18:20 に飛行機に搭乗し出発を待つも 30 分程度遅れて離陸する。カナダのバンクーバーとの時差は 8 時間だ。バンクーバーには成田での出発が遅れたが到着予定である 11:30 より 30 分早く到着する。日本時間だとまだ午前 3:00 だ、眠くて仕方がない。
此処でカルガリー行に乗り替えるのだが 2 時間 30 分もある。全員税関検査、入国申請も何事もなく直ぐに済み、バンクーバー行の搭乗口に向かい 2 時間程待ち合わせて機乗する。乗っている時間は 2:30 となっているが、実際は 1:20 程度であった。これはバンクーバーとカルガリー間の時差が 1:00 程有るからだ。カルガリーでは現地のスタッフの出迎えを受けてバスに乗りバンフへ (約 120KM。1:30 程) 19 時頃ホテルに着き、各自が割り当てられた部屋に荷物を入れ、直ぐにホテルのレストランで夕食だ。夕食後文雄さんと近くのリカーショップに成田で飲み代であるウイスキーを買えなかったのでウイスキーを買いに行く。このお店には色々と置いてあ

り、最高価格の物は何とカナダドルで 4000 ドルもする物もある。(凡そ 1 カダドルは 100 円相当) TEE GLENLIVET の 18 年物を購う。

3 月 13 日 (金)

朝起きて空を見ると空が赤く燃えているようだ。日本では朝焼けが強いと数日後には天候が崩れると言われているが、果たしてこのカナダではどうなのだろうか、この先の天候が少し気になる。
本日行くスキー場へはホテル前を 8:35 に出発するバスで Sunshine Village スキー場のケーブル駅に向かう。30 分程で到着。この Sunshine Village のケーブルは、Goats Eye Mountain 方面駅を経由して Lookout Mountain 行のケーブルだが、Goats Eye Mountain のスキー場は傾斜が強く上級向きの斜面が多いためか降りる人は少ない。20 分程度で Sunshine Village スキー場のベースに着く。先ずは一番近くにあるリフトに乗りこのスキー場の全貌を観察。見える範囲ではリフトは長短それぞれで 10 本近くあり、ここで一番高い所は 2,750m の Lookout Mountain だが、スキーエリアの広さ加減に驚く。リフトはこの頂上の直下まで伸びていて、上部はかなり傾斜がある。天気も良く白い急峻な山々を見ながら、山田さんのリードでほとんどすべてのリフトに乗り色々なコースをたっぷりと楽しんだ。雪はまあまあの状況であった。かなりの距離を滑ったのでなんだか疲れた。帰りはゴンドラ下の下山コースを滑って降りる。ホテルに戻り、少し浅めのバスタブにお湯をたっぷりと張り、ゆっくりと体をほぐす。
夜は全員で近くのステーキ屋で食事だ。食事より帰ってきてても部屋で文雄さん史郎さん達と遅く迄昨日購入したウイスキーを楽しむ。

3 月 14 日 (土)

朝 6 時に目覚めて外を見るとなんだか地面が濡れているようだ。外に出て確認をすると少し雨模様である。天気予報ではこの地方は一日曇りであるが持ちそうにもない。案の定 7 時頃には雨が降り出す。



(ホテル前でバスを待つ一行)



(サンシャインビレッジスキー場に立つ一行)



(ルックアウトマウンティンのリフトに向かう)

まずはお世辞にも美味とは言えない朝食だ(よく宿泊している人たちはこんなものを美味しそうに食べていると感心する)日本人の口にはやはり美味しいお米と味噌汁が一番で、おかずには干物と少しの漬物があれば言うことはなく、これが一番体に合っていて美味い。もう早くも拒絶反応が出てきそう。どうも米国やカナダという北米大陸の食事は僕には合わない。然し少しでも食べておかなければスキーという体力がいる運動をすることが出来なくなってしまう。高橋文雄さんは昨日転倒した時右足首を痛めたようで、少し腫れているので本日は休養とする。

朝食後本日は Lake Louise に行く予定で有ったが、現地に問い合わせると 7 時現在の気温が 6℃との事。昨日行った Sunshine Village の気温は 0℃との事なので目標を変更して Sunshine Village に向かう。ケーブル駅の始発点では雨がしょぼしょぼ降っていたがケーブルの高度が昇るにつれて曇となり、やがて雪となってきた。雨ではスキーをする気にはならないが雪ならどうという事はない。終点に着くとすでに 5～6cm 程度の積雪が認められるも、なんだか湿っぽい雪のようだ。早速偵察代わりに一番近くにあるリフトに乗車し、リフトを降りると雪が眼鏡につき視界が効かない。それでも下河辺君と二人で何回か同じコースで滑るもあり面白くないので早々とレストハウスに入って昼食とする。僕たちがレストハウスに入ってからそんなに時間も経たないうちに、別れて滑っていた石原さん達も上がってきた。昼食後は高橋と下河辺



(スキーロッジの昼食)

い、一緒にゴンドラ、バスと乗り継ぎホテルに早々に帰ってくる。ホテル着 14:50

昨日転倒して右足首を軽く捻挫した文雄さんは、本日は何処にも行かず、僕たちが帰って来る迄寝ていたようだ。

足を見るとかなり腫れていて明日スキーが出来るかどうか不明だ。昨夜痛飲したのが響いたようだ。本人は明日は滑ると言っているが、どうも足の具合を見るとひねったようで痛みもありあまり良い状態ではない。今晚はアルコールの類は一切摂取しないように忠告だけはする。後は冷たいが、本人の問題だ。

本日の夕食は瑞西 伊太利料理のレストランだ。どんなものかと思っていたら米国、カナダ式の料理と相違して、ほぼ欧州式の味付けの様で店の雰囲気も良く、注文したのは海鮮フォンデュ、ビーフとスリングのフォンデュ、鮭のグリルとライスとチーズの炊き込み付け合せ、ラクラン(ポテトに温チーズたっぷりのつけ)等々であり、全員余すところなく完食し満足した一晩であった。

3月15日(日)

本日は昨日行く予定で有った Lake Louise Mountain Resort のスキー場で有る。ホテル前のバス停を 9:10 頃出発し 10:00 頃にスキー場 (Front Side/South Face) についた。Base Area (1,646m。)天候は薄曇りで、はっきりしない。まずは Grezzley ゴンドラに乗る。全体に比較的急な斜面でしかもアイスバーン気味である。ともかく押さえて滑る。一旦ベースまで下り今度は左手の Glacier Express、ついで Top of the world というしゃれた名前のリフトで、Eagle Ridge (2,530m) 迄行き、Back Boul とよぶ反対側の余り傾斜のない広大な雪面を下って Powder Bowls へ向かう。新雪であつたら快適なスキーが楽しめる斜面であろう。Powder Bowls は比較的緩斜面で、2 本ほど滑り、リフトの乗り場にある Temple Lodge で昼食とする。元気のある人は更に正面のやや急な大斜面を滑る。その後 Front side に出るリフトに乗り、本日最初に滑った斜面を下ってベース迄一度戻る。休む人を除いて再度この斜面のあちこちを十分に楽しんで 3:35 のバスでホテルに帰着した。夕刻より雪となる。



(レイクルイーズスキー場につく)



(レイクルイーズスキー場、ゴンドラで上がる)

3月16日(月)

今日でこの楽しかったカナダでのスキーも最終日である。このバンフー付近には 3ヶ所のスキー場がありまだ行っていないのは一番近くにある Mt Norquay であるが、このスキー場は上級者向きのコブ斜面との事なので行かないことにして、Sunshine Village に結局 3 日も通うことになった。昨日の雪で新雪の上を楽しく滑ることが出来るかと思っていたのだが、案に反して少し重い新雪の為少々滑りにくい状態であった。それでも午前中はまだノートラックの斜面があり滑降は自ずと積極的に新雪を追う組とゆっくり通常斜面を滑るグループとなる。昼食後はもっと食欲に新雪を求めて滑りたいグループとゆっくり滑りたいグループと二つに分かれたのだが、ゆっくり滑りたいグループに入った、高橋文雄、下河辺、高橋聰の 3 名は雪面がガスはかかってはいないのだが、光線の加減で良く見えない状態が続いたので、滑らず早々とスキー場から退散した。



(レイクルイーズのテンプルロッジで昼食)

残った石原組は更にスキー場の境界を出て、誰も滑っていない新雪斜面を存分に滑り、4 時頃に帰ってきたようだ。

今夜は中華料理が食べたいとの発案があったので、タイ料理と中華料理をしている店に行ったのだが、それらしくはなっているが、日本山岳会の帰りに時には寄る事もある中華屋さんの方がよほど美味しい。

明日はもう日本に向けて帰る日だ。7 時朝食で 8 時には出発するとの事なので荷物もある程度パッキングして早く寝ることにしよう。

3 月 17 日

朝 7 時にいつも通り食事として、昨日中に荷物はほぼ片付いているので、昨夕に朝食に行く時には必ず荷物を外に出しておいて欲しいと言われているので、廊下に全ての荷物を出して朝食に行く。本日乗るカルガリー発の飛行機は 12:35 であるが、途中で通勤時間と一緒に道路が渋滞することもあるので早めに出発するとの事らしい。昨日決められた 8:00 には出発し飛行場には 9:40 に着く。セルフチェックイン機が不調で改めて一々荷物を預ける事になりひどく時間がかかる。スキーを出すとこれは別料金を貰うと言う。下河辺君がそんな事はない筈あなたが知らないだけだろうと聞くと、担当者が周りの係員に問合せやっと o k が出る始末。指示が一定していない。荷物の預け口からセキュリティチェックまで、1 時間 30 分も掛ってしまった。日本ならこんなことになったら強く非難されるだろう。これもカナダスタイルか。しかし早く出たお蔭でボーディングまで 1 時間 30 分近くもあり、時間を持て余してしまう。

定刻である 12:35 に飛行機はランニングに入りフライトする。この飛行機は成田直行便なので予定通り日本時間 18 日の 14:05(現地時間 18 日午前 5:05) 成田に到着して荷物を受け取り 14:40 に解散して、各自夫々思い思いに家路についた。

追記 石原達夫

昨年はオーストリーの氷河スキーのゼルデンに行ったが、今年はカナダ・バンフに来てみた。理由はフライト時間が短いこと、料金が安いこと等もあるがカナディアンロッキーのスキー場

はどんなものであるか今後の参考にしたいという思いがあった。海外のスキー場の特徴は日本のどのスキー場と比較しても広大でゆったりした気分がスキーが出来るということであろう。時期的には、1 月から 3 月初め頃までは各人色々と国内でのスキー計画が詰まっているので海外に出るのは 3 月も 10 日過ぎということになる。課題はその時期に良いコンデションの雪が有る場所と云うことになるのだが、そういうところを探すのはかなり難しいのだろう。

(最後の晩餐中華料理 竹園 にて)

もう一つの問題点は、国内のファミリアなスキー場であれば極端な話、集合場所と時間を決めて後は自由に滑るという事も出来るが、海外のしかも初めての場所ではそういう訳にもいかず原則全員で一緒に滑るということになる。この場合、参加者に体力や技量の差があると誰かがどこかで妥協するという事を強いられる。昨年のゼルデンの場合は一応全員があるレベル以上だったので全日全員で一緒に滑る事が出来た。今回の場合 2 つのスキー場とも、はっきりしたベースとなるロッジがあったので疲れてしまった人、不調の人はそこで一休みし、また合流という事が出来た。こういう事も考えながら場所を選ぶというのはそうた易いことではない。食事にしても人による好みがある。ゼルデンは 2 食付きだったので否応なく参加者全員が夕食もそこで食べてもらうというスキームだった。今回は朝の時間の関係上、朝食付きということで宿を決めたのだが夕食は参加者の嗜好を考えて毎回変えてみた。

それぞれ勝手に好きな所で食べなさいという選択もあろうがここは団体行動上全員一緒に夕食を摂った。

スキー場としては、サンシャインビレッジは雄大な風景と広大な斜面で変化に富んでいて万人に楽しめるスキー場であろう。季節がら雪はあまり良くなかったが、最終日は 10cm ほどの湿った新雪があり、これでも結構楽しめた。ただリフトに近いオフピステはたちまちのうち荒らされてしまい、正午近くになるとノートラックの斜面はほとんどなくなってしまった。そこで午後はスキー場の境界外に出て少し歩きバージン斜面を見つけて滑ってみた。相当に深いしかも重い雪であったがそれなりに楽しめた。ただスキー場に戻るには結構な距離を歩く羽目になった。午後に行った Lookout Mt. の左端のスキー場境界線際の長い急な新雪斜面も荒らされてはいたが皆よく健闘して滑りきったと思う。レイク・ルーズは標高こそサンシャインより低いがロッキーの中央部に近いため更に雄大な景色を楽しめる。斜面は一見小ぶりで急だが、背後に広いバックボールを従える。残念ながら斜面はアイスバーン気味で快適に滑るという訳にはいかなかった。急な斜面は、安全を期して堅雪の山でよく使う横滑りターンの連続で下ったが爽快感に欠ける。やはりスキー場の良し悪しは斜面もさることながら雪質で決まるということか。

さてこれらを考慮して来年はより楽しいスキーが出来る場所と時期をどう選択するか、今から考えるべき課題である。

(サンシャインの場外で深雪を滑る)

北八ヶ岳を歩く

渋の湯から高見石小屋(泊)を経て北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅まで

記・日出平 洋太郎



参加者：石原達夫 (L)、吉永英明、菊池武昭、田矢八束、醍醐準一、西谷隆亘、西谷加江、横田昭夫、武田頼子、日出平洋太郎 以上の 10 名

期日：3 月 28(土)～29(日)の二日間、山小屋(高見石小屋)一泊

行程：初日：渋の湯 11:37 発、高見石小屋 14:22 着(泊)。

二日目：高見石小屋 7:15 発、北へ、8:17～麦草峠、休憩～8:30、大石峠 8:46、茶臼山 9:59、縞枯山荘 11:43、12:15 北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅着。12:20 山頂駅発～北八ヶ岳ロープウェイ～山麓駅 12:27 着。

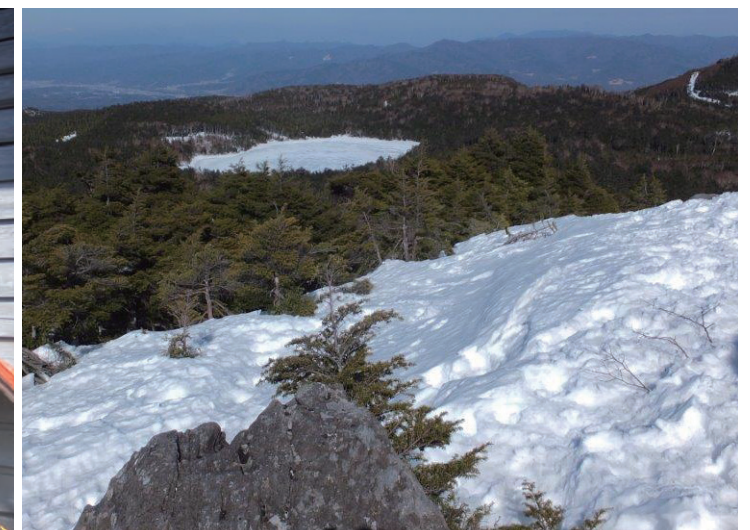
初日、小生は八王子で千葉、新宿から来るスーパーあずさ 3 号に乗り、仲間に合流する予定。この日は土曜日で春休み、加えて始発が千葉なので座れる可能性はないと判断、指定席を買ってきた。あずさ 3 号は八王子 8:01 発だが 30 分以上も早く着きすぎて、特急 2 本(7:29 発あずさ 1 号、7:47 発あずさ 51 号)を見送ってようやくあずさ 3 号に乗る。車内は意外に空いていて、所々空席が見える。乗った 10 号車は先頭から 2 両目、端っこ過ぎて見知った顔は見当たらない。9:51 茅野到着。下車すると、都内で切符を買った人達だろう、5～6 号車辺から降りた客の中に背の高い石原さんが見える。氏の背中を見ながら駅の南の空中回廊を渡ってバス乗り場へ。参加者数を知らぬ菊池さんが渋の湯まで、一先ず 5 人分のバス券を買う。＼1,150/ 人。名古屋からの武田、横田の顔も見える。誰かが醍醐氏が居ないのに気付く、携帯で呼び出す。日にちでも間違えて、未だ寝ているのではないかと、なんて冗談を云っていたら、バス乗り場を探していたのか、道路の向こうの駅舎からこちらに歩いてくるのを見つける。やれやれである。

乗客は多いが、先に並んでいた我々総勢 10 人は最初のバスに収まった。積み残しは増発バスに。これがないと大揉めになっただろう。10:25 渋の湯行き発車、1 時間は掛かるだろうと直ぐ居眠り。11:17 終点渋の湯前着。天気良し、雪ありである。みんながアイゼン、スパッツなどの支度をしている間に渋御殿湯の写真を撮る。小生は面倒なのでアイゼンは付けない。吉永さんもアイゼンレスだがピッケルが目立つ。形は昔風でシャフトも長いが金色のメタルシャフトである。

11:37 登山開始、例によって石原先頭だが、いきなり日蔭の雪を踏んでの急登である。ルートは概ね沢筋だから仕方がない。雪は踏まれて硬く滑り易いので気を使う。トレースもあるが、何本もありはっきりしない。時折ルートを間違える。12 時、ウォーミングアップが出来たところで昼食。12:35 出発、今度は 1 時間以上登って 13:35 休憩。女性が多い中高年組と抜きつ抜かれつのシーソーゲーム。13:44 出発、14:22 高見石小屋着。日は未だ高いが今日はここで泊り。登りはじめて 3 時間弱、その間に昼食休憩もあったので実働 2 時間。まあ、こんなものか。時間があるので有志で小屋の横の高見石展望台に登ってみる。真っ白い白駒池が良く見えるが、動くものがある。湖上に人が居るのだ。割れて沈没の心配はないらしい。14:45 小屋に戻る。気温が低いのか、今日のルートで雪が溶けてグチャグチャの所は全く無く、歩いても快適だった。



(高見石小屋)



(真っ白い白駒池)



(食前酒が進みごぎげんの様子)

18:30 の夕食までには時間がある、食前酒が大いに進む。小屋は電気も水もなく、昔ながらの小屋であった。電気は兎も角、水は何か近くに水源があるのではと思ったもの。

26 年度行事及び山行参加者 26 年 4 月 1 日～ 27 年 3 月 31 日

1 古戦場をめぐる山旅 (花見を兼ねて) 関ヶ原周辺 期日 4 月 5 日～ 4 月 6 日
参加者 石原達夫、吉永英明、田谷八束、日出平洋太郎、小亀真知子、菊池武昭、寺田正夫、寺田美代子、
下河辺史郎、川村光子、高橋聰、西谷可江、高橋文雄。廣島孝子、武田頼子、横田昭夫 (16 名)

2 知立祭り見学と猿投山登山 期日 5 月 3 日～ 4 日
参加者 武田頼子、石原達夫、石原泰子、田谷八束、今津 (武田) 友人 (5 名)

3 甲斐駒前衛峰 日向山 期日 5 月 18 日日帰り山行
参加者 平井喜久枝、石原達夫、寺田正夫、寺田美代子、高橋聰、日出平洋太郎、小亀真知子 (7 名)

4 早月尾根 期日 7 月 27 日から 31 日
参加者 吉永英明、醍醐準一、石原達夫、高橋聰、横田昭夫、山村英彦 (6 名)

5 会津駒と燧山 期日 9 月 16 日から 19 日
参加者 吉永英明、石原達夫、山村秀彦、西谷隆亘、西谷可江、武田頼子 (6 名)

6 八海山 期日 10 月 4～ 5 日
参加者 石原達夫、高橋聰、日出平洋太郎、小亀真知子、廣島孝子、菊池武昭 (6 名)

7 奈良の山旅 期日 11 月 17 日～ 11 月 19 日
参加者 石原達夫、石岡慎介、武田頼子、高橋聰、吉永英明、西谷隆亘、西谷可江、廣島孝子、永田由紀子 (9 名)

8 忘年山行 秩父浦山山荘より武川岳 期日 26 年 12 月 13 日～ 14 日
参加者 石原達夫、菊池武昭、高橋聰、下河辺史郎、石岡慎介、醍醐準一、小亀真知子、廣島孝子、西谷可江、
大塚幸美、小笠原辰夫、武田頼子、日出平洋太郎、寺田正夫、寺田美代子 (15 名)

9 新年会 飯田橋 かくや 期日 27 年 1 月 14 日
参加者 石原達夫、菊池武昭、高橋聰、下河辺史郎、日出平洋太郎、醍醐準一、田矢八束、吉永英明、西谷隆亘、
西谷可江、小亀真知子、大塚幸美、廣島孝子、平井喜久枝、中川秀利 寺田正夫、寺田美代子、 (17 名)

10 スノー合宿 妙高ユアーズイン 期日 2 月 21 日～ 2 月 23 日
参加者 醍醐準一、田谷八束、西谷可江、横田昭夫、石原達夫、下河辺史郎、高橋聰、武田頼子、(8 名)

11 カナディアンロッキースキー 期日 3 月 12 日～ 3 月 18 日
参加者 石原夫妻、廣島孝子、下河辺史郎、高橋文雄、高橋聰、石原友人 3 名 (9 名)

12 北八ヶ岳 期日 3 月 28～ 3 月 29 日
参加者 石原達夫、武田頼子、横田昭夫、醍醐準一、田谷八束、日出平洋太郎、菊池武昭、吉永英明、
西谷隆亘。西谷可江、(10 名)

26 年 4 月より 27 年 3 月迄に一度でも行事、例会等に参加された会員
石原達夫、菊池武昭、高橋聰、下河辺史郎、醍醐準一、田矢八束、大塚幸美、廣島孝子、
寺田正夫、寺田美代子、吉永英明、西谷隆亘、西谷可江、小亀真知子、日出平洋太郎、中川秀利、武田頼子、
横田昭夫、小笠原辰夫、川村光子、川井靖元、高橋文雄、平井喜久枝、 石岡慎介 (24 名) 現在会員数 51 名

二日目、予報では今日は雨だが、昨夜は月明かりがあって星も出ているようだった。前線の
来るのが遅れているのだろう。6:30 朝食。7:15 出発、朝日が射せばまぶしい程の快晴無風である。
今日はアイゼンを着ける。雪は昨日より軟らかい。気温が高いのだ。8:17 麦草峠着。ヒュッテ
も静かだし、一面の雪だ。山越えの国道はもう除雪されていて車がドンドンを想像していたが、
まだまだ冬の眠りから目覚めていない。少し休んで麦草峠 8:30 出発、9:59 茶臼山、雲が出て



(麦草ヒュッテ)



(縞枯山荘)



(ロープウェー)

きて、好天は終わりの空気。10:40 縞枯
山、コブのような小山を登ったり、下った
りだ。ちょっと道を外して 11:05~ ランチ
休憩 ~11:20。11:43 縞枯山荘着。アイゼン
も脱ぐ。本隊はここからはロープウェイで
人里に下って二日間のハイキングは終わり。
田矢、醍醐の二人は、今日はこの山荘に泊り、
明日は蓼科山に登って帰ると云う。北八ヶ
岳ロープウェイの山頂駅の手前まで、残る
二人は我々を見送りについてきたが途中で
横岳の方に道を分ける。吉永さんはその横
の急峻な壁でグリセードのデモンストレー
ション。気付くと夕方のような暗さで雪も
チラついてきたが、未だお昼だ。明日、蓼
科山に行く二人の天気が気になる。12:07
北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅着。ハイキン
グ終わりの 8 人は 12:20 ロープウェイ発、
雪が舞っている。12:27 山麓駅着。茅野行
のバスは 13:05 である。バスまで余裕があ
るので食堂を探して山麓駅に戻る。食堂に
は生ビールがあったので喉を潤したのは横
田、菊池に、この駄文を弄している日出平
の 3 人。

茅野駅には 14 時着。名古屋方面行の武田、
横田が先ず別れ、自由席で十分という西谷
夫妻、吉永、日出平の 4 人は 14:19 発のあ
ずさに乗り、最後に残った石原、菊池は次
のあずさの指定で岐路についた。

2014

山想倶楽部大集合



2014年度山想倶楽部定例山行に参加したメンバー（敬称略）

後列左から

石岡、菊池、平井、醍醐、下河邊、日出平、石原（泰）、小亀、大塚、
西谷（隆）、川村、山村

前列左から

横田、中川、寺田（正）、田矢、高橋（文）、

石原、高橋、武田、廣島、西谷（可）、寺田、小笠原、永田、吉永、

（この写真は、2014年度山想倶楽部企画山行に参加したかたがたの合成写真です。
行事に参加したにもかかわらず掲載されていない方がいた場合、カットする写真が無かった
為ですのでご了承ください。）